

2022 年度 報告書

英国大学医学部における
臨床実習のための短期留学
Clinical Elective Attachment

ニューキャッスル大学医学部
Newcastle University

リーズ大学医学部
University of Leeds

公益財団法人 医学教育振興財団
Japan Medical Education Foundation

2022 年度「英国大学医学部における臨床実習のための短期留学」について

本短期留学は、卒前臨床教育の充実向上を図るため、医学教育振興財団が推薦する日本の医学生を、英国大学医学部における臨床実習に4週間派遣するものである。1990年3月に第1回の派遣が行われ、派遣総数は465名となった。

コロナ禍の中、2020年度、2021年度は派遣の中止を余儀なくされたが、2022年度は事業を再開することができた。全国の国公立大学医学部より20名の学生の応募があり、財団の選考委員会により7名を選考し、以下の日程で派遣した。

2023年3月6日(月)～3月31日(金)

- ・ニューキャッスル大学医学部（4名）

2023年6月5日(月)～6月30日(金)

- ・リーズ大学医学部（3名）

本留学の選考過程で実感するのは、多くの優秀な学生が本短期留学を希望しているということである。財団としてはできるだけ多くの学生にチャンスを与えたいと念願している。関係者のご支援・ご協力を得ながら、本留学の拡大を目指し努力を続けたいと考える。

2023年11月28日

公益財団法人 医学教育振興財団

◆ 目 次 ◆

◆ ニューキャッスル大学医学部

浜松医科大学	大村 佳蓮	02
山口大学	福田佳那子	07
徳島大学	堺 亜紀	11
札幌医科大学	中林さやか	17

◆ リーズ大学医学部

千葉大学	大津山彩子	23
国際医療福祉大学	吉田結美子	29
順天堂大学	山田 春花	35

ニューキャッスル大学医学部

Newcastle University

2023.03.06～03.31

◇浜松医科大学 大村 佳蓮

◇山口大学 福田佳那子

◇徳島大学 堺 亜紀

◇札幌医科大学 中林さやか

Newcastle 大学での臨床実習

浜松医科大学医学部医学科 6年 大村 佳蓮

1. はじめに

この度、公益財団法人医学教育振興財団(JMEF)のご支援のもと、英国の Newcastle 大学で臨床実習を行いました。多くの方々のご協力により学びの多い4週間となりました。実習で学んだことを少しでも還元できるよう、報告いたします。

2. 応募

大学1年生の頃、学内の留学報告会でこのプログラムを利用し留学した先輩の話を知り感銘を受け、応募を志すようになりました。遺伝子治療には興味があり、3年生の基礎配属でも学ぶ機会があったため、治療が盛んな Newcastle 大学での留学に応募しました。幸い今年からプログラムが再開されたため念願叶って留学することができました。

選考

IELTS は出願を決めてからすぐ公式問題集を購入し勉強し始めました。Reading と Listening は過去問を中心に問題数をこなしました。Writing と Speaking は例年の出題傾向を把握し、イメージトレーニングを行い本番に備えました。

学内選考が6月の中旬に実施されたため、それまでに志望動機や履歴書を準備しました。8月上旬に財団から書類選考通過の連絡と面接の案内があり、8月末に御茶ノ水で面接が行われました。今年は2部屋に分かれて面接が行われたため、最初は想定外の事態に緊張しましたが無事終えることができました。最初の部屋では志望動機(英語)に加えて応募書類の内容について質問がありました。私は日本と英国で行われている遺伝子治療の違いや倫理的問題点についての質問を受けました。次の部屋では英語で1分間の自己紹介を行った後、履歴書について質問を受けました。私は幼少期海外に住んでいたため、カルチャーショックを受けた出来事や海外と日本での立ち振る舞いの違いについて質問がありました。面接の1週間後に合格通知をいただきました。合格通知を受け取った際には緊張と嬉しさのあまり手が震えていたのを記憶しています。

3. 留学準備

合格発表の後はすぐ書類の手続きを始めました。Disclosure and Barring Service Certificate、Visitor visaなどは平日のみ手続きが可能であったため、実習の合間を縫って申請しました。今年は寮が例年と異なり Windsor Terrace に変更となりました。

4. 実習

実習は Royal Victoria Infirmary (RVI) と Freeman Hospital にて下部消化器外科と一般外科を2週間、整形外科を2週間、General Practitioner (GP) 診療所にて1日行いました。それぞれの診療科では医療体制の違いも多く、学ぶことが多かったです。

下部消化器外科・一般外科

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
第1週	RVI	RVI	RVI	RVI	RVI
AM	Ward Round	Endoscopy	Colorectal MDT	Theatre	Theatre
PM	Theatre	Clinic	Tumor MDT	Theatre	Theatre
第2週	Strike Day	Strike Day	GP clinic	RVI	RVI
AM	Theatre (手術)	Trauma theatre Ward	Pharmacist Clinic Specialist nurse clinic	Theatre	Clinic
PM	Theatre	Minor Injuries Unit	Doctor's clinic	Theatre	

2週間の実習予定。※ Theater : 手術、MDT : Multidisciplinary Team

外科では回診やカンファレンス、外来、内視鏡検査、手術等に参加しました。主には指導医について実習していましたが、自分の希望する診療を見学することもできました。

病棟は一般外科と下部消化管外科で構成されており、消化器癌とヘルニアの術後患者さんが大半でした。欧米人では膠原病の発生率が高いため、ヘルニアが多いと知りました。英国では術後の早期離床、早期食事開始を目標として掲げており、Enhanced Recovery After Surgery (ERAS) protocol に基づいて病棟管理が行われておりました。そのため、外科病棟では入退院の回転が早く、手術日に入院する患者さんも少なくはありませんでした。

外来は、指導医である Dr. Gallagher の下部消化器癌とヘルニア外来を見学しました。英国では医療の集約化に伴い、ヘルニア等の良性疾患に対する治療は先延ばしになりがちでした。実際、外来には手術を受けることができず苦しむ患者さんの姿が沢山ありました。その際、先生が「ヘルニアは良性疾患であるため世間では癌ほど注目されず、治療の整備が整わないことが多い。しかし、手術をすることで患者の人生を大きく変えることができる。このことを世間に広めて手術設備を整え、より多くの人を助けたい。」とおっしゃっており、その言葉と姿勢に心を打たれました。実際、外来では複数の患者さんが先生に「You changed my life」と述べていました。医療で患者さんの人生を改善できる喜びを、外来という短い時間で経験できました。

消化器外科では、大腸癌切除術とヘルニアの手術を見学しました。術式はダビンチによるロボット支援下、腹腔鏡下、開腹と豊富でした。ロボット支援下では dual console が実施され、先生の得意分野に分けて手術を分担していました。その際にはコンソール内から手術を見学する機会がありました。コンソールから見た術野では、先生が操作しているロボットの動作が一つ一つ細かく鮮明に見えたため、手術をより理解することができました。

外科の実習中には医師の労働環境改善を求め、下級医によるストライキがありました。3日間上級医が病棟管理や当直等、下級医の仕事を引き受けていたため、予定手術や外来、内視鏡検査等の通常通りの診療が行えず病院が麻痺していました。上級医が疲弊している姿も見受けられましたが、先生方は口を揃えて「未来の医療を守るために下級医のストライキを支援する。」と述べており、その寛大さに驚きました。

ストライキ初日は幸い整形外科の手術があり、先生方から許可をいただき急遽見学することになりました。また、外傷に興味があることを話すと翌日の診療にも誘ってもらい、外傷の緊急手術を見学することになりました。RVI は英国に 12 箇所ある外傷センターのうちの一つであり、Northern Trauma Network に属する高度救命救急センターです。このため、毎日交通事故などの外傷症例が搬送され、整形外科では外傷専属の手術室が設けられていました。ストライキ 2 日目は午前中に手術見学と病棟実習を行った後、Minor Injuries Unit で walk-in 患者の診察を見学しました。また、外来の間には骨折の画像診断と治療について講義があり、救急外来での初期対応についても学ぶことができました。

General Practitioner

2 週目の水曜日は GP の診療所にて実習しました。実習した診療所には 9000 人の患者さんが所属しており、毎日 10 人の医師と数名の薬剤師、看護師で診療していました。GP では医師だけでなく、薬剤師や看護師も同様に診察を行っており、多職種連携によるチーム医療の理想的な形を垣間見ることができました。外来では薬剤師や看護師が医師と同様に診察をして、自由に薬剤の処方をしている点が印象的でした。

慢性閉塞性肺疾患と喘息の外来は Specialist nurse が担当していました。喘息外来では地球温暖化を配慮し、吸入器をより環境に良いドライパウダー定量吸入器に変更するよう患者さんに呼びかけていました。単に医療的効果を追求するのではなく、環境面に配慮した医療を行なう点には魅力を感じました。また、看護師の外来では Motivational Interview という問診方法を取り入れている点が印象的でした。これは患者主体の問診であり、自らの意思で治療を選ぶことにより、治療への受け入れと意欲を高めることを目的としています。治療に対する患者自身の気持ちや意見を聞いた後、医療者が患者に治療を勧めます。その結果、患者は治療をより意識するようになり、受け入れやコンプライアンスが上昇するとされています。

実習した診療所は Newcastle 市の中でも経済的に恵まれない地域にあり、診療だけではなく、community service を通して地域貢献を積極的に行っていました。診療所主体で患者の会を開設し、診療所を憩いの場として提供していました。また、診療所には庭があり、定期的に地域の人々と庭の整備をすることで地域交流を計っていました。これより、診療所が単なる医療施設ではなく、地域を支える重要な役割を果たしていると学びました。

整形外科

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
第 1 週	RVI	Freeman	Spine Center	Freeman	Freeman
AM	Trauma MDT Fracture Clinic	Theatre	Spine theatre	Arthroplasty theatre	Bone and soft tissue tumor MDT
PM	Hemophilia Clinic	Theatre	Spine theatre	Arthroplasty theatre	Tumor clinic
第 2 週	Plastic surgery and hand unit	Freeman	RVI	LIFE center	The great north children's hospital
AM	Emergency plastics clinic	Theatre	Tumor theatre	Newcastle Diabetic Foot Meeting	Pediatric clinic
PM	Hand theatre	Theatre	Trauma theatre	Genetic clinic	Pediatric theatre

整形外科では外傷、脊髄、関節、腫瘍、小児の分野を外来や手術を通して見学しました。他にも、形成外科で手外科、遺伝子外来を見学する機会がありました。さらに、実習期間に開催されていた学会に参加する機会にも恵まれ、貴重な2週間となりました。

整形外科の朝は8:00からの Trauma MDT meeting で始まります。前夜搬送された症例、緊急手術が必要な症例について医師同士で話し合い、その日行う手術の順番を決めていました。また、週一回は形成外科と合同で MDT meeting がありました。そこでは皮膚移植の適応や、糖尿病による足壊疽の切断と温存方法などについて多くの議論がありました。

指導医の Dr. Chambers が足関節専門の医師であるため、月曜日の午後は Hemophilia clinic に参加しました。Hemophilia clinic では血友病患者さんを足関節専門医と肘関節専門医、血液内科専門医、血友病専門の理学療法士と看護師、合計5人の合同外来で診察していました。血友病では関節内出血が起こると滑膜での炎症により関節軟骨の破壊が進み、血友病性滑膜炎が引き起こされます。近年は血友病に対する遺伝子治療が進み、関節病を伴うことは少なくなっています。しかし中高年の世代では適切な治療を受けることができず、進行した関節病変に悩まされている方が一定数います。外来では主にそのような患者さんを診察し、温存的治療を行うか、人工関節置換術を行うか判断していました。

手術日は人工関節置換術など、多くの手術を経験することができました。特に、指導医の Chambers 先生はシャルコー関節症を専門とされていました。シャルコー関節症とは糖尿病による末梢神経障害が原因で足関節の病的骨折や関節破壊が起きる病態のことです。感染を伴うこともしばしばあり、下肢切断と予後が非常に悪いです。そこで下肢切断を防ぐべく、先生は足関節の髓内固定と創外固定を併用し、足関節の完全固定を行います。これにより足の温存が可能となり、シャルコー関節症の予後を改善することが可能となりました。Newcastle 大学は英国で2番目に多くこの手術を行っている施設であり、貴重な経験となりました。

実習中には Newcastle Diabetic Foot Meeting が開催されており、学会に参加することができました。学会では感染症内科や血管外科、放射線科、整形外科と多岐にわたる分野からの医療関係者が参加しており、数々の興味深い講義が行なわれていました。抗菌薬や抗菌性セメントの適応、血管内治療の適応、画像診断、緊急手術の適応等、糖尿病に伴う足病変について多方面から考えることができ、治療に関する新たな視点を得ることができました。

整形外科で最も影響を受けた分野が腫瘍でした。腫瘍を担当する Ghosh 先生は熱意に溢れている先生で、いつも目を輝かせながら腫瘍分野の魅力について語ってくれました。しかし彼は決して大変さを隠すことなく、診療のありのままについて教えてくれました。外来では癌の告知から術後のフォローアップと、悪い報告から良い報告まで多くを経験しました。外来で沢山の感情が飛び交う中、先生は常に冷静に優しく患者さんに接していました。また、手術は大規模のものも多く、骨盤の一部を切除する症例もありました。手術ではナビゲーションシステムを用いており、その精密さに圧倒されると同時に術後の合併症について考えるといたたまれなくなり、骨腫瘍の厳しさを突きつけられました。ただ、困難の中でも Ghosh 先生は患者さんのために常に最善を尽くしていました。先生の真摯な姿勢を見て将来 Ghosh 先生のような医師を目指したいと思いました。

二週目の月曜日には形成外科で手外科の診療を見学しました。午前中は救急外来から紹介された患者さんを診察します。手術適応のある症例はその日の午後に手術していたので、外来から治療まで一通り見学することができました。また、午前中の外来では病歴聴取をする機会が

ありました。一人で行うのは緊張しましたが、聞くことを事前にリストアップして、適宜治療に結びつけるための質問をすることに努めました。午後の手術で、自分の問診が治療に結びついている場面を見ることができ、心に残る経験となりました。

木曜日の午後は遺伝子外来を見学しました。留学前から Newcastle 大学での遺伝子治療には興味があったため、念願の機会となりました。遺伝子外来では遺伝子疾患が疑われる初診患者さんの診察を行い、遺伝子解析の紹介をしていました。多くは発達障害疑いの小児患者さんで、家族全員で外来に来ていました。外来では初めに主訴を確認し、その経過について詳しく聴取します。その後、患者家族に家系図を書いてもらい、疑わしい遺伝的特徴がないかを確認めます。ある程度の情報を得たら鑑別疾患をあげ、身体診察を行います。外来を通して診療の流れやどのように治療が行われているかを理解することができました。

5. 生活

実習中は病院に併設されている Peacock Hall の図書館で自習していました。ここではカルテが自由に閲覧できたので、その日の復習や翌日の予習を行っていました。わからないことは随時 First Aid と Oxford Handbook of Clinical Medicine を用いて調べていました。

Windsor Terrace には留学生が滞在しており、病院の外でも学生との交流がありました。夕食を一緒に食べたり、週末旅行に行ったりと楽しい時間を過ごすことができました。また、週末は Dr. Price のご家族にお誘いいただき海辺を観光する機会にも恵まれました。

6. 最後に

Newcastle での実習は毎日が充実しており、学びの多い一ヶ月となりました。実習では英国の医療面接や医療技術の高さを実感するとともに、日本の医療技術の高さも実感することができました。英国では全国民が無償で医療を受けることができる反面、医療施設の集約化と医療資源の節約が進んでおり、気軽に医療機関へ受診できず検査を受けることが難しいと感じました。その結果、疾患の進行や急性増悪があり、医療体制の弱点も垣間見えました。英国と日本の医療の長所短所を知れたからこそ、今後臨床現場に出る際には両国の良さを取り入れて医療に携わりたいと思います。恵まれた環境の中で数々の経験を積むことができたのはかけがえない経験となり、今後への刺激ともなりました。この一ヶ月間で学んだことを自分の知識として身につけることで、今後の勉強や臨床現場での実践に取り入れていきたいです。

最後にこのような貴重な機会をいただきましたことを改めて感謝申し上げます。JMFE の皆様、浜松医科大学の先生方と学務課、Price 先生、Newcastle でお世話になった先生方と医療スタッフ、現地で共に学んだ3人、応援してくれた家族をはじめ、多くの方々にご支援いただきましたこと、深くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

7. 経費

交通費（日本-英国間の航空運賃除く）：¥54000（Britrail pass 含む）

宿泊費（Windsor Terrace）：¥116000

食費：¥50000（近くのスーパーにて自炊、外食）

通信費：¥4000（プリペイド SIM）

Newcastle University の実習を経て

山口大学医学部医学科 6年 福田 佳那子

【はじめに】

この度は公益財団法人医学教育振興財団(JMEF)様のご支援により、初めての臨床留学をさせていただきましたことを心から感謝いたします。COVID-19の影響により令和元年度を最後に短期留学のプログラムは一旦休止をされておりましたが、このようにまた再開をしていただきとても嬉しく思います。不安定な世界情勢により、渡英前は不安なこともありましたが無事に1か月間、充実した留学をすることができましたのでここに報告をいたします。

【選考までの流れと選考について】

私は、平成30年度に同じプログラムで渡英されておりました齊藤先生より、このプログラムの良さを医学部2年生時で教えていただいたことから、時期がきたら絶対に受けようと決めておりました。5年生になると米国内科医学会日本支部所属の学生と英語で臨床推論を1か月に1回行ったり、海外で活躍されている先生方との交流を盛んに行うなど、少しずつ留学に向けて準備を進めてまいりました。しかし、IELTSの準備だけは直前になってしまったため、残念ながらスコアは満足の行くものではありませんでした。しかし、とてもありがたいことに書類選考を通過したことから、面接試験に進むことができました。面接の時間は大体12-13分程度です。面接は日本語と英語で行われますが、どうしても答えられないような難しい質問は一切問われず、自己紹介となぜ留学をしたいのか、留学で何を学びたいのか、志望科がある場合はなぜその科を希望しているのか、などを聞いていただきました。応募書類を作成するときにも同じような質問があるかと思いますが、自分を一から振り返り、英国留学を経てどのような医師、そしてキャリアを形成していきたいのかを改めて考えるよい機会となりました。面接の準備については自分で想定質問などを用意して、それに対して簡潔にかつ相手にわかりやすいように伝えられるように何度も練習を行いました。

【渡英までの準備について】

面接試験の合格をいただいたのは8月の下旬でした。そこから実際に渡英をするまでに約半年間の期間があるのですが、提出書類が多く、あまり余裕がないのが実情です。そのため、書類の提出を求められてからすぐに動くことをお勧めいたします。特にCOVID-19のワクチン証明書も提出を求められるのですが、日本語で書かれている証明書はすべて英語に翻訳をしなければならず、更にきちんとした翻訳サービスにより行われていることを証明しなければならないことから、書類提出のメ切の3週間前にはすべての書類が揃えられるようにスケジュールを組みました。

【実習について】

Newcastle University では1か月間で3つの科を選ぶことができます。私の場合は、Respiratory and General Medicine (呼吸器内科)を2週間、Infectious Diseases (感染症内科)を1週間、Oncology (腫瘍内科)を1週間を選択しました。同時期に渡英した大村さんと堺さんは Respiratory and General Medicine の代わりに General Surgery を選択されていました。

✓ オリエンテーションについて

Newcastle University では実習前の金曜日に Infectious Diseases でもお世話になる Dr. Price との顔合わせがあります。私たちが主に実習をさせていただく Newcastle Royal Victoria Infirmary (RVI)はとても大きな病院なのであらかじめ顔合わせと病院内のツアーをしていただける機会をいただいたことで、本格的に臨床実習が始まったときに迷子になることがありませんでした。その夜は先生と一緒にローカルバブにも足を運びました。

✓ Respiratory and General Medicine について

実習の1、2週目は Respiratory division の Consultant である Dr. Macfarlane にお世話になりました。Respiratory division では大きく分けて Clinic (外来)と Ward (病棟)があるため、午前中と午後に分けて Clinic と Ward の業務に参加をさせていただきました。Clinic も Tuberculosis (TB), Lung Cancer, Idiopathic Pulmonary Fibrosis (IPF), COPD, Asthma, Cystic Fibrosis (CF) と呼吸器の疾患ごとに細かく分けられており自分が興味のあるクリニックに自由に参加をさせていただくことができました。クリニックの業務としては、先生と一緒にカルテを閲覧し、それから問診を考え、実際に患者さんの診察に同席をさせていただいたのちに、次の治療について考察をしフィードバックをいただくという一連の流れを経験させていただきました。ある程度余裕が出てくると、先生が診察をする前に患者さんに問診をさせていただき、その内容を先生にフィードバックをする、といった実習も可能です。Newcastle University では、日本では出会えないような背景を持たれている患者さんも多く、アフガニスタンから足で渡って英国にたどり着いた後に結核に罹患していることが分かった方や、戦争から逃げてこられた脱走兵が発熱後に活動性結核に罹患していることが判明したケースなど、驚くような症例を沢山経験することができました。Ward Round では、各病室に入院されている患者さんの背景を先生が事細かに説明してくださり、その後行う治療と一緒に見学させていただきました。「時間が空いているときには自由に患者さんとコミュニケーションをとってもいいよ」とおっしゃってくださったため、病棟に足を運び患者さんと他愛もない話をするのがとても楽しかったです。Newcastle のアクセントは英国でも最も難しいアクセントと言われているらしく、なかなか聞き取るのは難しかったのですが、それでも一生懸命に伝えようとしてくださる姿勢がとても嬉しく、すきを見ては病棟に通っていました。

Respiratory Division では Lung Cancer や Idiopathic Pulmonary Fibrosis など、予後が非常に厳しい患者さんもおられることから、Palliative care のチームが介入してくださることが多くあります。Palliative care は英国が進んでいることを日本の先生からうかがっていることもあり、是非見学をさせていただきたいと交渉して1日見学をさせていただくことができました。ボードには Karnofsky Performance Scale を用いて患者さんの状況を一目でチームがわかるように可視化できる工夫がされているほか、breathlessness に対して最適な姿勢の提案や hand fan を用いての

呼吸改善方法など、それぞれの症状に対してエビデンスに裏付けされた治療の提案をされていることが印象的でした。また患者さん用にパンフレットなども準備されており、家に帰ってからも患者さんや患者家族自身が試せる方法などがありケアに対しての温かい思いを垣間見ることができました。その他にも、Dr. Macfarlane に付いて Accident and Emergency の準夜勤と一緒に入らせていただき、まだ診断されていない患者さんの身体診察や検査のオーダーをさせていただいたりしました。

✓ Infectious Diseases について

実習にもようやく慣れてきた3週目には、オリエンテーション時に説明をしていただいた Dr. Price に付いて Respiratory and General Medicine 同様に Clinic と Ward round に参加をさせていただきました。Dr. Price のご専門は HIV であることから、医学生向けにされている HIV の講義に参加をさせていただいたり、HIV に対しての Stigma を撲滅させることを目標とした展示会のイベントに参加をさせていただいたりしました。ここでは初めて U=U(undetectable = untransmittable) という考え方に触れ、抗 HIV 療法を継続されており血中のウイルス量が 200 copies/ml 未満の状態であればほかの人に性行為を通じて感染させることはないというメッセージを患者さんにわかりやすく伝えていることが印象的でした。しかし一方で、大切なパートナーだからこそきちんと正直に話すべきだとジレンマに陥っている患者さんも多く、心に寄り添う治療を行うことの大切さを学びました。

✓ Oncology について

最後の1週間は RVI からバスで 30 分ほどに位置するがん専門施設の Northern Center for Cancer Care (NCCC) で実習をさせていただきました。スーパーバイザーとして指導をしていただきました Dr. Frew は泌尿器科、特に前立腺がんを見ていらっしゃる先生であり、コンサルタントとして外来の診察、治療方針の立案、他科の先生へのコンサルタント、放射線技師との Multidisciplinary Team Meeting (MDT) Meeting など多岐にわたる業務をされていました。1週間のうち4日間は Dr. Frew につかせていただきましたが、血液内科の領域もみてみたかったことから、1日は他の先生にもつかせていただきました。NCCC の近くには home of cancer care として有名な Maggie's があり、がんを患っている患者さんのみならず、その家族や友人が心を落ち着かせることができる場所があります。必要であれば治療にかかる費用の相談やカウンセリングなども受けることができ、すべてのプログラムが無料で提供されています。もし機会があったら見学をさせていただくとよいかもしれません。

【臨床実習の服装について】

おそらく案内があるかと思いますが、白衣は原則禁止で（実際に現地では薬剤師以外は着用していません）袖もめくれるものが推奨されています。私はスクラブをもっていったのですが、洗いやすく乾きやすかったので実習中はそれを着ていました。また臨床実習中は歩き回ることが多いので歩きやすくカジュアル過ぎない黒い靴が重宝しました。

【生活について】

私も含めて、留学した4人全員が同じ寮に入ることができました。寮は4階建てでそれぞれ

に共同のシャワー、トイレ、そしてキッチンが付いています。大きな冷蔵庫もあるので、土日にスーパーやマーケットに買い出しをして、作り置きをしておくこともできます。私たちのフロアにはオランダ人やインド人、イタリア人が住んでいて毎日キッチンでそれぞれの郷土料理をふるまいました。最後の3日は **farewell party** として一緒にお酒を飲んだり、外にご飯を食べに行ったりして、とても楽しい日々でした。留学した月が3月でまだ雪が降っていたのですが、寮は暖房が付いていてとても過ごしやすかったです。洗濯機も寮の外に使える場所があるので、アプリをインストールして使わなければならないので、寮に住んでいるルームメイトなどに使い方を聞くのをお勧めします。また、英国はキャッシュよりもカード文化なので、キャッシュは少なめ（1か月で8万円程度）に持っていくカードでお支払いをするほうが効率が良いかと思います。

【余暇について】

土日は完全に休みとなるので、週末は毎日違う都市に行って観光をしていました。Newcastle は York も Edinburgh も鉄道で2時間あればいけるのでぜひいろいろなところに観光に行ってみてください。おすすめは、日本で **Britrail Pass** を購入していくことです。何回まで列車にのるかを選ぶことができるので自分のスケジュールに合わせて選択ができます。私は **Britrail Pass** の存在をすっかり忘れて日本を飛び立ってしまったので、少し損をしてしまいましたが、当日券は割と安く購入することができるので、少ない回数を選択して、あとから付け足すこともできるかと思います。おすすめは Edinburgh にある **Surgeon Hall** です。

【最後に】

英国臨床留学は私の将来に大きな影響を与えてくれる経験となりました。Multiculture だからこそ、いろいろな背景をもつ患者さんがいらっしゃいましたが、その一人一人に対して真摯に向き合う医療従事者の姿を見て、医療には国境がないことを実感することができました。また、最初は言語の壁やシステムの壁に戸惑いがあったものの、徐々に信頼をしていただけることにより実習中に経験させていただける幅もどんどん広がっていくのを感じました。この経験を糧に、卒後は国際的に活躍できる医師になりたいと思います。最後に、留学にあたり多大な力添えをいただきました医学教育振興財団のスタッフの皆様、留学を許可いただきました山口大学の先生方、そして心細いときに支えてくれた大村さん、堺さん、中林さんに心から感謝を申し上げます。来年に旅立つ後輩たちにとってこのレポートが少しでも有益であれば幸いです。

【経費】

- ・日本～英国間の航空運賃(往復)：18万円
- ・寮費：11万円
- ・Wi-Fi：3万円
- ・食費（土日、平日の昼食）：6万円
- ・鉄道費：4万円
- ・旅行保険費：2万円
- ・その他雑費：3万円



▲ 1か月間、共に臨床実習を乗り切った仲間

ニューキャッスルでの4週間

徳島大学医学部医学科6年 堀 亜紀

1. はじめに

このたび、公益財団法人医学教育振興財団(JMEF)の実施する「英国大学医学部における臨床実習のための短期留学」に参加させていただき、ニューキャッスル大学で4週間実習をする機会をいただきました。海外で臨床実習をするのは初めてでしたが、現地で先生方や患者様、日本からの派遣メンバーとの交流を通し、大変実り豊かな4週間となりました。応募や渡英前の準備に際し、先輩方の過去の報告書が大変参考にさせていただきました。この報告書でこれからの後輩の活躍をサポートできればと思います。

2. 応募から派遣まで

【応募のきっかけ】

私は徳島大学1年生の時に大学の掲示板を見てこのプログラムを知りました。徳島大学入学前、神戸大学国際文化学部にて言語学や通訳・翻訳を専攻しており、3年次から1年間ドイツで交換留学をさせていただきました。当時は紛争の影響により大量の難民がドイツに流れ込んでいた時代で、マイノリティとして社会で生きていく厳しさを目の当たりにしました。そこから日本に住む移民・難民の置かれる状況を知り、支援したいと思うようになり、帰国後は医療通訳を派遣するインターンを半年間行いました。次第に医学自体に興味を惹かれ、また、医療通訳普及に関して医療関係者側の声が少ない現状から、医師を志すようになり、現在徳島大学医学部で勉強させていただいております。このプログラムでは実際に移民大国である英国の病院で臨床実習を行うことができ、臨床現場において移民・難民に対してどのような言語的サポートがあるか、多様な背景をもつ患者にどのように医療者が接しているのかを体感することができます。加えて、学年が上がるにつれ、言葉の壁だけでなく経済的・社会的・地理的要因が健康格差を広げていることを知り、Social Determinants of Health (SDH) の分野で進んでいるイギリスの医療政策に関しても学びたいと思い、応募を決意しました。

【IELTS】

何かと先延ばしにして受験せずに5年の5月も終わりまで来てしまっていました。新型コロナウイルス感染症の影響でこのプログラムも今年は無いのだろうかと思っていたのですが、偶然学務課の掲示板の前を通りがかったところ、ニューキャッスル大学とリーズ大学で応募が再開されるというフライヤーを発見し、学務課に飛び込んで申し込みをしました。その日が大学内の締切日で、学務課の前をあの日通って本当によかったです。話がそれましたが、7月中旬の財団の提出締切日まで IELTS 受験の機会が1度しかなく、急ぎ対策をはじめ、6月末に受験しました。6月頭の TOEFL に向けて準備をしていたおかげか、Overall 7.5 (Listening 8.5、

Reading 8.0、Writing 7.0、Speaking 6.0)を取得でき、これでなんとか応募できると大変安堵した記憶があります。Speaking の形式に慣れることができず、スコアが伸び悩んでしまいました。一度の受験で応募条件を満たすのは相当にプレッシャーが大きいので、早めから準備をすることをお勧めします。短期間しか準備期間が設けられない方は、Target Band 7(Simone Braverman (2015) “Target Band 7: IELTS Academic Module – How to Maximize Your Score (Third Edition)”)に基づき各セクションの戦略をたて、過去問を解きながらその戦略を軌道修正していくと良いと思います。

【選考】

私の大学では応募したのは私のみだったので、学内選考はありませんでした。応募書類では、目標とする医師像を明記し、なぜそれを目指すのか、このプログラムがどのように目標の礎になるのか、一貫して自分の言葉で説明することを心がけました。文字数が限られており、過不足なく述べるのが難しかったため、内容が伝わりにくく無いか、友人に見せ、助言してもらいました。8月初頭に書類選考合格の通知をいただき、23日に東京のホテルで面接を受けました。会場は2つに分かれており、私は前半3人、後半2人の面接官の先生がいらっしゃいました。英語の質問には英語で、日本語の質問には日本語で返答するという形式でした。前半はまず英語で、医療制度について日本の医療が英国よりも優れている点は何かを聞かれ、その後は日本語で応募書類をもとに質問されました。(日本ではすべての人が治療を受けられるがなぜ健康格差があるのか、健康格差やSDHについてどこで学んだか、日本の医学部は健康格差について関心が薄いのはなぜだと思うか など)後半は英語で1分の自己紹介をした後、日本語で再受験の理由や応募動機、日本と英国のコロナ対策に関してなどを聞かれました。医学知識は問われませんでした。大変緊張していましたが、面接官の先生方に話を聞いていただける良い機会と考え、気持ちを落ち着けて面接に臨みました。どの先生方も真摯に接して下さり、私の回答が的を得ていない時も助言をくださり、大変参考になりました。

【手続き】

合格通知を2週間程度でいただき、メンバーとLINEで連絡を取り合いながら準備を進めました。10月中旬までにオンラインで書類をアップロードする必要があり、急ぎ書類を用意しました。徳島大学からは過去に参加者がいなかったため、わからないことが多々ありましたが、財団の望月様や徳島大学の学務課の方々、そして一緒に留学予定だった大村さん、中林さん、福田さんに大変助けていただきました。手続きで戸惑った書類を以下に挙げておきます。

・Disclosure and Barring Service：平日に住民票のある警察署で発行しました。プログラムの詳細と過去の報告書、ニューキャッスル大学からのメールを印刷し、持参しました。

・Deans Letter：ニューキャッスル大学指定のテンプレートに必要事項を記入し、写真を添付の後、医学部長にサインと判子をいただきました。実習初日の日付から3ヶ月以内に発行日を更新した同じ内容の書類を年明けにメールで再度送信する必要があります。

・Letter of Good Conduct：入学年度や学籍番号、在学中の素行・成績に問題がないことを記した英文を作成していただき、医学部長のサインもいただきました。こちらも発行日を3ヶ月以内に更新したものの提出が必要と記載されていましたが、Deans Letterのみで問題ないようでした。

VISAはStandard Visitor VISAを事前に取得していききました。1月頭に大阪のビザセンターを予約し、2月頭にはVISAが発行されました。申請に際して、VISA申請書類、パスポート、

Offer Letter、VISA Letter、IELTS のスコア、資金証明、寮の契約書類、航空券、在学証明を参考に提出しました。Health Questionnaire は 1 月末に詳細が送られてきました。地域実習で自宅を離れていたため渡航外来がなかなか受診できず、渡航直前の 2 月後半の提出となりましたが、無事受理されました。(血液検査結果:水痘、B 型肝炎、C 型肝炎、HIV の抗体価、T-SPOT、予防接種歴: COVID-19、B 型肝炎、麻疹・風疹、ムンプス、DTP)

【留学準備】

渡英までに英会話も兼ねて、大学職員の方と同級生 2 人と 4 人で医療面接の練習を毎週していました。また、フェローとして働かれていた先輩をお願いし、三沢米空軍病院でも 3 日間間診や身体診察を行わせていただきました。

[参考サイト:Geeky medics(<https://geekymedics.com>)、Bite Medicine(<https://www.bitemedicine.com>)]

3. 実習について

【オリエンテーション】

ニューキャッスル大学では、実習が始まる前の金曜日に Dr. Price がオリエンテーションをさせていただきます。Royal Victoria Infirmary (RVI) は 1600 床を有する巨大な病院で、英国で新型コロナウイルス感染症を初めて治療した病院です。大きく 3 つの Wing が合体しており、Dr. Price の案内がなければ迷子になっていたと思います。RVI のカフェでコーヒーをご馳走になりながら、コロナ下の状況のお話をお聞きしました。その後はメンバーと一緒に、ID や学生証を発行し、その日の夜に近くのパブで Dr. Price と何人かの先生方とお話しすることができ、月曜日からの実習がより楽しみになりました。

【消化器外科】

実習前半の 2 週間は大村さんとともに消化器外科で実習をさせていただきました。事前に頂いていたスケジュールでは Upper Gastrointestinal (GI) とされていましたが、Supervisor の Dr. Gallagher は Lower GI の Consultant だったため主に下部消化器外科での実習となりました。朝は病棟回診から始まり、回診後は、手術見学や内視鏡、外来に参加しました。消化器外科の先生方はとても優しく明るい方ばかりで、病棟の案内や手術室の入り方を始め、休日の観光地まで教えていただきました。

手術は、水曜日を除き 1 日 2-5 件行われており、ヘルニア修復術や腸切除術など色々な手術に参加させていただきました。手術室はいくつかの小部屋に分かれており、手術が実際に行われる部屋に加え、麻酔の部屋、手洗い場などがありました。分かれている理由を聞いてみると、手術器具や術場の雰囲気を見る前に麻酔をかけるため、患者が怖い思いをする機会が減る可能性や、手術の回転率を上げる効果があるのではないかと教えていただきました。閉創の間に次の患者に麻酔をかけ始めるため、手術の合間が短く、手術部にある休憩室でコーヒーをいただきました。英国の外科医に関して、National Health Service (NHS) に所属している外科医は、その手術件数や術後の合併症の発生率、死亡率など予後が実名とともにインターネットに公表されています。そのため患者は外科医について自ら調べることができ、良い手術成績の外科医の元には全国から患者が集まるとのことでした。外科医の中にはデータが公表されることにナーバスになってしまう方もおられるとお聞きしました。

外来では患者のいる部屋に医師が診察に向かうシステムになっていました。診察中はカルテに記入することはなく、診察が終わってから元の部屋に戻り、音声自動入力ができるマイクに

診察内容を話し、カルテを記載していました。Dr. Gallagher は癌とヘルニアのスペシャリストで、英国全土から彼の元に患者が訪れます。特に体重増加による臍・癒痕ヘルニアの患者が多かったです。長期間待機してやっと受診することができた診察で、体重を減量してからでない手術に進めない（無理に手術するとコンパートメント症候群になるため）と伝えられ、患者が取り乱してしまう場面も多々ありました。

内視鏡では、日本の技術は高度であると感じました。上部消化管内視鏡は経口のみで、下部消化管では便塊で視野が確保しにくい場面があり、検査当日の朝6時まで飲食可能（日本は前日21時まで）であることなどが関係しているのではないかと思います。

同時期に実習をしていたドイツの留学生にカルテの見方や職員食堂、参考書やカルテをゆっくり見ることができる Peacock Hall Library を教えてもらいました。どれも4週間の実習全体で非常に役立ったので、ニューキャッスル大学を訪れる皆様は是非聞いてみてください。

【General Practitioner (GP) 見学】

2週目の水曜日に大村さんとともに、Dr. Coulthard の診療所を見学させていただきました。Benfield Park 診療所では約10人の医師で9000人の患者を担当しています。患者1人につき10分の枠で予約がとられていましたが、時間を過ぎたらからといって患者の話を切り上げることは一度もなく、カルテも診察中は記入せずに真摯に話を聞いておられた様子が印象に残っています。GPに聞いてみたかった質問が2点あり、Dr. Coulthard にお話を聞かせていただきました。1点目は、服薬アドヒアランスを向上させる方法に関してです。服薬の中断により病状が悪化してしまった患者に対し、どのように指導すればいいかお聞きしたところ、患者に薬を飲むよう説得はせず、病態について説明し状況を自覚させ、“It’s your choice.”と患者自身に考えて行動してもらおうとおっしゃっていました。実際にその日診察に来られた患者で、高脂血症に対し薬物治療を始めるかどうかに関して、薬を飲んだ場合・飲まなかった場合の心血管系リスクスコア(QRISK)をハートのイラストを用いて患者にわかりやすく説明していた様子が印象的でした。2点目は、慢性心不全や糖尿病など、薬物治療だけでなく生活習慣の改善も重要な役割を持つ疾患の患者に、薬物治療以外でどのようなサポートをしているかです。症状が悪化し一時的に薬物で改善がみられても、それを引き起こした環境の改善がないままでは、増悪を繰り返す一途となってしまいます。Benfield Park Clinic では地域でボランティアを募り、テニスや卓球など患者が参加できる運動の機会を作ったり、ガーデニングや家庭菜園で定期的に参加できるイベントを行っているそうです。そういった取組みは、生活環境の改善だけでなく、独居の高齢者が地域住民との繋がりを作る機会にもなるのではないかと感じました。

【産婦人科】

3週目は産婦人科で、午前午後ほぼ毎日別の場所で実習をさせていただきました。Maternity Assessment Unit は、妊婦の Accident & Emergency (A&E) の役割を果たしており、体調に異変を感じたり、破水があれば、GP や助産師だけでなく妊婦自身も連絡し診てもらうことができます。ここでは実際に患者に問診・身体診察を行い、上級医にプレゼンをさせていただきました。また、先生の指導のもと内診もさせていただきました。ハイリスク病棟である Delivery Suite だけで、個室の分娩室が12部屋、手術室も2部屋用意されており、年間6000児が産まれる RVI の規模の大きさを感じました。実習をさせていただいた日にも予定の帝王切開が3件と緊急が2件あり、術野で見学させていただくこともできました。産科で印象に残ったことは、妊婦健診や誘発、分娩、胎児出生前診断などどの場面でもパートナーやご家族など必ず誰かの付き添

いがあり、辛い時も嬉しい瞬間も分かちあっている様子でした。日本の臨床実習では新型コロナウイルス感染症の影響で立ち会いができないお産や帝王切開を見学していたことがあったか、より暖かい雰囲気と感じました。

婦人科では、ウロギネの手術や過多月経に対する NovaSure を用いた子宮内膜アブレーション、婦人科癌・子宮内膜症の外来を見学しました。癌の告知に立ち合わせていただいた際、その場に笑顔があることに大変驚きました。患者の友達になり、気持ちに寄り添うように心掛けているとおっしゃっていました。

【感染症内科】

最終週はこのプログラムをアレンジしてくださった Dr. Price のもとで実習をさせていただきました。Dr. Price はサル痘を英国で最初に診断した医師で、目を輝かせて私たちにいつも感染症について熱心に教えてくださり、私も感染症の魅力に引き込まれました。感染症内科では病棟回診の他、HIV 外来も見学させていただき、患者さんともお話しすることができました。HIV 外来では、HIV のウイルス量の管理に加え、通常は GP が行う高血圧や高脂血症の管理も行なっていました。不思議に思い先生に尋ねてみたところ、GP の診療所には多くの知り合いが通っているため、何かの拍子に HIV が陽性であることが知られてしまうことを避けたいと、患者から希望があったとおっしゃっていました。

4. 感想

今回の臨床留学では、知りたかった内容に加え、感染症内科の面白さや知り合った方々の暖かさに触れることができ、周囲の人々のおかげで本当に参加することができてよかったと思える研修となりました。

この留学で、英国のイメージをいい意味で裏切られました。英語が一度で伝わらなかった時も、どなたも耳を傾けて聞いてくれ、院内や街で道がわからない時も必ず話しかけてくれました。こうした環境は、移民の多さから生み出されているのではないかと感じました。というのも、院内だけでも、患者や医療従事者を問わず、出身がさまざま、英語が話せない患者さんもいらっしゃいました。実習中に、日本のインターンシップでは立ち会うことができなかった医療通訳の現場を対面・電話とそれぞれ1度ずつ見ることができました。NHS の電話通訳は約 50 言語に対応しており、費用は無料です。外来では予約表に患者の氏名や ID と並んで通訳が必要かどうか記載されており、通訳の需要の多さを感じました。日本では医療通訳は限られた病院でのみ利用可能で、国主導のシステムではないため、提供できる言語に偏りがあったり、費用の面で患者負担が発生することも少なくありません。こうした側面から NHS は優れていると感じました。さらに、全ての検査や治療にも患者負担は発生しません。また、専門医で行った治療が GP のカルテから確認できるネットワークも確立されており、患者にも診察の内容が共有されるなど、NHS が非常に優れたシステムと感じる面も多くありましたが、一方で、問題点も見えてきました。ここ数十年で専門医受診までの時間や A&E での待ち時間はうなぎのぼりに増加しています。実際に婦人科の子宮内膜症のクリニックで外来受診まで待ち切れず、何千ポンドもする Private Doctor にかかっていた患者もいらっしゃいました。また、物価の上昇と人手不足による業務の増加に相反し、医療従事者の給料は下落する一方で、Junior Doctors の医師の給料は 2008 年と比較して 26%も減少しました。この状況を受け、賃上げを求め Junior Doctors は 3月 13 日から 15 日までストライキを決行しました。その間消化器外科

では、通常手術や外来を主に行う **Consultant** が病棟をカバーし、約 17 万件の手術や外来がキャンセルされました。私が知り合った RVI の **Consultant** ではストライキに賛同している方がほとんどでしたが、ニュースでは **Junior Doctors** を非難する **Consultant** もみられました。その後も 4 月に 4 日間のストライキを行うなど混乱は続いています。NHS についてあらゆる側面から考える機会を得ることができ、この時期に渡英できて幸運でした。受け入れてくださった RVI の先生方に感謝致します。

5. 費用

寮 費 £683.4

食 事 外食 £10/回

交通費 航空券 約 22 万円、**BritRail Pass** (8 日間) 約 4 万円

通信費 3000 円 (**Three** の SIM カードを日本で事前に購入しました)

6. 謝辞

今回このような機会を与えてくださった医学教育振興財団の皆様、渡英前から帰国後まで全てをサポートしてくださった望月様、プログラムをアレンジし休みの日もドライブに連れて行ってくださった **Dr. Price** やニューキャッスル大学の先生方、**Medical Elective** スタッフの皆様 に心から感謝を申し上げます。また、本プログラムへの応募にあたり、快く応援してくださった徳島大学の西岡医学部長をはじめとする先生方、書類作成や手続きを助けていただいた第一教務係の米原様、村澤様には大変ご尽力いただきまして、本当に感謝しております。医学教育振興財団から 15 万円の補助金をいただき、また、徳島大学からも約 22 万円の補助をいただきました。応援し支えてくれた家族や、医療面接の練習に付き合ってくれた皆様も本当にありがとうございました。また、ニューキャッスルで共に過ごした 3 人のメンバーには、大変助けをもらい、感謝の気持ちでいっぱいです。休日に **York** を訪れたり、特に大村さんとは実習でその日あったことを夕飯を食べながらシェアし合ったり、みんなと一緒に過ごした時間は忘れません。このプログラムで学んだことを活かし、日本の医療に貢献できるよう、これからも邁進して参りたいと思います。この度は、貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。

Newcastle University での短期留学を終えて

札幌医科大学医学部医学科 6年 中林 さやか

1. はじめに

この度、公益財団法人医学教育振興財団(JMEF)のご支援の下、Newcastle University(NCU)で4週間の臨床実習を行う機会をいただきました。2019年度以来3年ぶりの派遣であり、過去の報告書と異なる点も多くございましたため、そのような点を中心に報告いたします。また、私はこれまで海外在住・留学経験がありませんでしたので、先輩方の報告書には大変助けられました。この報告書がこれから応募される方や派遣が決まった方の一助となれば幸いです。

2. 応募理由

大学1年生の時に医学英語の先生からこのプログラムについて伺いました。先輩方の報告書を拝見して、英国で行われている丁寧な問診・身体診察や、General Practitioner(GP)制度などの特徴的な医療制度を自分の目で見て学びたいと考え、応募を決意しました。

3. 留学までの流れ

2022年		11月6日	Application form 提出期限
6月30日	学内選考応募締め切り	12月26日	実習科希望提出期限
7月19日	応募書類郵送締め切り	12月29日	ビザ申請センター訪問
8月3日	書類選考合格通知	2023年	
8月23日	面接試験	1月12日	郵送でビザ到着
9月1日	面接試験合格通知	2月24日	実習科決定

4. IELTS

2022年2月頃から市販の書籍とIDPの無料オンラインセミナーでIELTS対策を行いました。2022年の3月から4月にかけて何回かIELTSを受験し、結果はL7.0/R6.5/W6.5/S6.5でした。以前の報告書では全員がOverall 7.0を満たしていたとのことだったため不安でしたが、時間的・金銭的にこれ以上の受験は厳しいと判断し、このスコアでの応募を決めました。

5. 面接試験

面接試験は2022年8月23日にホテル東京ガーデンパレスにて行われました。今年度は20人の応募があったようです。面接は2部屋で行われ、主に提出した書類に沿って質問されました。例年のような医学知識を英語で問うような質問はありませんでした。一部回答するのが難しい質問もあり、手応えが全くなかったため、合格の通知を受け取った際には非常に驚きまし

た。以下に質問された内容を挙げます。

1 分間で自己紹介(英語)、本留学で得たものをどのように還元していくか、英国と日本の医療制度の違いについて(英語)、日本でもイギリスのように医療費を無料にするべきではないのか、今までの実習ではあまり患者さんに関わる機会がなかったのか、日程的に行けない留学先

6. Application form

オンラインで記入・提出します。以下の書類データの提出が必要でした。

Dean's Letter(テンプレートに記載)、CV(書式自由)、Copy of Passport、Transcript of Study、Certificate of COVID-19 Vaccination(接種証明書アプリで発行)、Letter of Good Conduct(犯罪経歴証明書)、Medical Malpractice Insurance、English Language Certificate(IELTS の成績証明書)

紙の書類はスキャンして提出しました。Medical Malpractice Insurance は大学で加入している医療保険の英文証明書が良いと思います。私の場合は弊学で加入していた医療保険が海外での臨床実習をカバーしていないとのことでしたので、NCU から受け取った書類に記載されていた保険会社(Electives One Stop Shop)に連絡し、新たに加入しました。

7. Visa 取得

今年度は Standard Visitor Visa を取得するよう NCU から指示がありました。ビザ申請にあたり、提出が必須または提出が推奨されていた書類に加えて、過去の派遣生が準備していた書類も提出しました。日本語の書類は証明書付きの翻訳サービスを利用しました。

必須：The passport or travel document

推奨：Evidence of funds(親の通帳のコピー)、Evidence of support from your sponsor(親の署名入りのスポンサーレター)、Evidence of the relationship between you and your sponsor(戸籍謄本)、Evidence that you are enrolled or accepted on a UK course(NCU の Visa support letter)

その他：ホテルと寮の領収書、弊学の在学証明書、IELTS 成績証明書、飛行機 e チケット控え

8. Health assessment • Vaccination evidence

オンラインで健康調査に回答した後、ワクチン接種証明を提出するように指示されました。罹患済みで接種していなかったワクチンもあったため、母子手帳や接種証明書に加えて大学 1 年生の時に測定した抗体価の結果も証明書付きの翻訳サービスで英訳して提出しました。

9. 留学準備

大学同期と英語で診察練習を行ったり、書籍・Web サイトで勉強したりして準備を進めました。留学中に NCU の医学生に教えていただいた Web サイトも併せて紹介します。

- Oxford Handbook of Clinical Medicine
- First Aid for the USMLE Step 2 CS
- OSCEstop <<https://oscestop.education/>>
- Geeky Medics <<https://geekymedics.com/>>
- PassMedicine <<https://www.passmedicine.com/>>
- Zero to Finals <<https://zerotofinals.com/>>

10. NCU での実習

前半 2 週間は General Surgery または Respiratory Medicine、後半 2 週間は Infectious Disease、Oncology/Haematology、Paediatrics ID/General、Transplant、Hepatology、Obstetrics、Orthopaedics から選択し、実習を行いました。実習は基本的に Royal Victoria Infirmary (RVI) で行いましたが、Orthopaedics では Freeman Hospital でも実習を行いました。

院内の服装は、男性は襟付きのシャツにスラックスやチノパン、女性はブラウスとスカートやワンピースなどでした。ノーアイロンの服を持って行くと便利です。スクラブを着ている方もいらっしゃいました。靴は革靴やパンプス、落ち着いた色のスニーカーを履いている方が多かったです。スクラブは Changing room のものを利用できます。支給された ID badge では Changing room を解錠できなかったため、Operation theatre の解錠権限と併せて担当部署 (nuth.cardaccess@nhs.net) にお問い合わせに入れるようにしていただきました。

● Respiratory Medicine / Assessment Suite

1～2 週目は福田さんと Respiratory Medicine で実習しました。Supervisor の Dr Macfarlane が初日に希望を聞いてスケジュールを組んでくださいます。他の診療科の見学も含めて可能な範囲で調整していただけるため、見てみたいものがあれば積極的に伝えた方が良いと思います。

院内では患者さん・スタッフともにほとんどの方がマスクを着用していませんでした。また風邪症状がある場合や COVID-19 陽性の場合でもマスクを着用していれば勤務可能であり、日本との対応の違いに驚きました。

Clinic (外来) は、Tuberculosis (TB)、Cystic fibrosis (CF)、Interstitial lung disease、Asthma、General respiratory、Sarcoid、Lung cancer に分かれています。診察中には患者さんの理解度を確認したり、平易な言葉を使い時間をかけて説明したりする場面が多くあり、患者さんに説明を理解していただくことを重視されている様子が伺えました。英語を話されない患者さんが受診された際には、電話による通訳サービスを利用していました。通訳は日本語を含む 60 以上の言語で提供されており、多様な患者さんが受診される英国ならではのサービスだと感じました。NCU の 5 年生と一緒に Clinic を見学する機会もありましたが、NCU の学生は Consultant の同席なしで患者さんの問診・身体診察を行っており、英国の医学生の診察スキルの高さに驚きました。

Ward (病棟) には、肺がん・COPD・CF などの呼吸器系の疾患を持つ患者さんだけでなく、一般内科の患者さんも入院していました。2 週目には全国で 3 日間 Junior doctor のストライキがあったため、Word のみの実習となりました。Word 実習中には患者さんの診察を行い、Consultant に報告する機会もいただきました。初めての英語での診察と報告でとても緊張しましたが、温かい言葉をかけていただき、なんとかやり遂げることができました。また実習を通じて、Physiotherapist が人工呼吸器の管理を行ったり、Speech and language therapist が経鼻内視鏡検査を行って患者さんに所見を説明したりするなど、医師以外の医療従事者により多くの権限が与えられている点に驚きました。

実習中には Assessment Suite での Night Shift を見学する機会もいただきました。ここでは RVI の救急科や GP から紹介された患者さんに対応します。患者さんの情報が十分でない中で診察を行っていくため、診察能力がより要求されると感じました。

- **General Surgery**

2週目の木曜日と金曜日に **General Surgery** で実習させていただきました。Clinic では Mr Khatri の診察を見学させていただきましたが、外科の外来でも問診や身体診察が丁寧に行われていました。ヘルニアの患者さんに減量するように勧める際に、なぜ減量する必要があるのかを患者さんが納得されるように丁寧に説明されている姿が印象に残りました。

腹腔鏡とロボット支援下手術も見学させていただきました。マスクは手洗いをしているスタッフしかしておらず、鼻出しマスクをしている方もいるなど、日本と比べて感染予防にあまり注意が払われていない印象を受けました。ドイツからの留学生が手洗いをして閉創を行っており、学生であっても多くの手技を経験する機会があると感じました。

- **Infectious Disease**

3週目は福田さんと **Infectious Disease** で実習しました。このプログラムの **Supervisor** でもある Dr Price も所属されている診療科です。HIV や TB など日本の実習では見る機会のなかった感染症の診療を拝見することができ、貴重な経験を積むことができました。

HIV の患者さんの診察では、疾患の特性上、新たなパートナーがいないかなど患者さんが答えづらい質問をしなければいけない場面もありましたが、「これは受診された方全員に聞いていることなのですが…」など、患者さんが答えやすいように配慮した声かけをされていました。

Dr Price による医学部の講義にも参加させていただきました。講義では Dr Price が実際に出会った患者さんの例を多く提示されており、学生が HIV について理解しやすいように工夫されていました。また学生も疑問点があればすぐに質問するなど、積極的に授業に参加しようとする姿勢を感じました。

- **GP 見学**

3週目の水曜日には GP である Dr Coulthard の診察の様子を見学させていただき、**Quality and Outcomes Framework** と呼ばれる興味深い診療報酬システムについてお話を伺うことができました。これは、「高血圧患者のうち直近の血圧が 140/90 mmHg 以下の人の割合」、「がん患者のうち、診断後3ヶ月以内に話し合いの機会があり、受けられる支援について伝えられた人の割合」など、行った診療の結果に応じて報酬が支払われるシステムです。行った診療そのものに対して報酬を支払うシステムでは報酬のために過剰な治療が行われてしまう恐れがありますが、診療の結果に対して報酬が発生するシステムであれば患者さんにとって必要な医療だけを提供することができるのではないかと思いました。

- **Orthopaedics / Hand Unit**

4週目は大村さんと **Orthopaedics** で実習しました。**Orthopaedics** の手術では手術室に入るスタッフは全員マスク着用が必須であり、手洗いをしているスタッフはアイシールドをするなど、日本と同様の感染防御が行われていました。**Operation theatre** の隣には **Anaesthetic room** と呼ばれる麻酔をかけるための部屋がありました。

Orthopaedics では、下肢の手術、小児の手術・外来、**Plastic Surgery** による **Hand Unit** を見学させていただきました。手術見学では、糖尿病による **Charcot** 関節に対する関節固定術、小児の骨軟骨腫切除術、手のイヌ咬傷に対する手術など様々な手術を見学させていただきました。

Hand Unit の Clinic では患者さんの問診をとり、カルテも書かせていただきました。

● Palliative Care Team / End of Life Transport

Dr Macfarlane にスケジュールを調整していただき、Palliative Care Team の業務を見学しました。患者さんの希望に応じて Chaplain (牧師) が患者さんの病室を訪れたり、患者さんの家族が休息を取ることができる Haven と呼ばれる部屋があったりなど、患者さんとその家族が人生の最期を心穏やかに迎えられるような取り組みがなされていました。

私が特に驚いたのは、End of life transport と呼ばれる、死が間近に迫っている患者さんを救急車で希望の場所に送り届けるサービスです。病院から患者さんの自宅に搬送するだけではなく、同じ建物内の別の部屋やサッカースタジアム、海岸など患者さんが希望するあらゆる場所への搬送を請け負っています。このようなサービスによって少しでも多くの方が自らの望む場所で最期を迎えられるようになるのではないかと思います。

11. Newcastle での生活

今年度は派遣生全員が 12 Windsor Terrace という寮に滞在しました。RVI までは徒歩で約 10 分、地下鉄 Jesmond 駅までは約 5 分と便利な場所にありました。私の部屋は Basement floor にある Small room でしたが、Basement floor とはいえ窓もあり、部屋の広さもちょうど良かったです。以前までの寮と異なり食堂がなかったため、食事は自炊する必要がありました。キッチンやトイレ、シャワーは共用でした。

SIM は現地で EE の Pay as you go SIM (60 GB) を購入しましたが、寮や RVI など Wi-Fi が使えたため、20~30 GB ほどあれば十分だと思います。

週末は BritRail Pass を利用して Durham・York・Edinburgh などを訪れました。2 週目の週末には Dr Price に車で Bamburgh Castle に連れて行っていただきました。

日本から持参するとよいものとして、スクラブ、実習用のトートバッグ、常備薬、乾燥・レトルト食品、タッパー容器、折りたたみハンガー(部屋にハンガーがなかったため)、洗濯ネット、洗濯物を持ち運ぶ大きめのバッグがありました。また、コインランドリーでは洗剤投入後に故障が判明する場合もあったため、投入後に回収できるように現地でジェルボールを購入すると良いと思います。

12. おわりに

このような貴重な機会を与えてくださった JMEF の皆様、留学を支えてくださった札幌医科大学の先生方・職員の皆様、Dr Price をはじめ私たち派遣生を温かく迎えてくださった NCU・RVI・Freeman Hospital の皆様、そしてこの留学に関わってくださった全ての皆様方に心より感謝申し上げます。また留学をともに乗り越え、時に励ましてくれた派遣生の大村さん、堺さん、福田さんにも感謝いたします。

13. 経費

- | | | | |
|------------------------|---------|-------------------------------|------|
| ・滞在費 (Windsor Terrace) | £ 644.4 | ・交通費 (航空運賃・BritRail Pass を除く) | £ 90 |
| ・食費 | £ 370 | ・通信費 (EE pay as you go SIM) | £ 35 |
| ・その他生活費 | £ 60 | | |

リーズ大学医学部
University of Leeds
2023.06.05～06.30

◇千葉大学	大津山彩子
◇国際医療福祉大学	吉田結美子
◇順天堂大学	山田 春花

Leeds 大学での 1 か月の新生児科臨床実習

千葉大学医学部 6 年 大津山 彩子

応募動機

自大学での実習中、難病を持つ患者さんと出会い、日本では導入されていない治療や医療制度を海外で学ぶ必要性を感じたためです。

準備

5 年生の 4 月末に大学からのメールで募集を知り、IELTS の勉強を始めました。7 月頭までに計 3 回受験し総合スコアが 7.0（2 回目受験時のもの：Reading 7.5, Listening 7.0, Writing 6.5, Speaking 6.5）のものを提出しました。（1 回目：総合 6.5 R7.5 L7.0 W6.5 S5.5、3 回目：総合 7.0 R9.0 L5.5 W6.0 S7.0）IELTS の受験を終えてから、財団の面接対策を千葉大の先生にご協力いただきながら行いました。大変お恥ずかしいことですが、大学に入学してから TOEFL さえ一度も受けずに何も英語の勉強をしてこなかったため、IELTS のための 2 か月の英語学習は本当に大変なものでした。同じような方がいらっしゃるかもしれませんが、1 か月で Speaking, Reading のスコアは 1.5 あげることができたので諦めずにとりあえずやってみるのがいいかもしれません。財団の面接は 8 月に終え、その後合格通知をいただきました。面接では、志望動機、どのような医師になりたいか、といった質問がありました。英語か日本語で答えることになっており、英語でも日本語でも良い場合の質問はすべて日本語で回答しました。

実習科の決定は 6 年生 4 月、リーズ大学からの実習受け入れの正式な通知を 5 月に受け取り、健康診断書や無犯罪歴証明のための書類などの要請もこの頃だったため、実習開始に間に合うよう、急いで用意しました。

医学英語については、5 年生 4 月から大学での週 1 回の医学英語授業の受講をしていました。また 5 年生 7 月より USMLE step1 の対策を通じて学習を進め、6 年生 5 月に受験しました。

私は今回の実習に参加するまで 10 日以上海外に滞在したことはなく、ごく普通の中学高校を卒業して大学に入学しました。受験における英語は得意でしたが、今回の実習では自分の英語能力の圧倒的な不足は感じざるを得ませんでした。今後同じような方で応募を検討される方にお伝えできればと思うのは、医学英語の勉強とリスニングの練習だけは必ずしておいた方がよいということです。USMLE の学習を通じて学んだことが今回かなり役に立ち、何度もその知識に助けられましたが、一方でリスニングができないことによって挫けそうになったことが何度もあったからです。海外経験、ないしはそもそも英会話の経験さえ足りていない私のような方は必ず壁や阻害感を感じるようになると思います。IELTS はただのスコアでしかなく、自分の英語能力を過信してはいけなさと感じました。

実習環境について

リーズはロンドンより北に位置し、イギリス本土のほぼ中央にあります。リーズ大学に附属する病院は2つあり、Leeds General Infirmary (LGI) と St James's hospital (SJH) となっています。LGI はリーズの中心地から近く、リーズ大学の敷地内にありますが、SJH はやや離れており、2つの病院をシフト制で回っているスタッフも多いため、1時間に3回のシャトルバスが運行されています。

住居については病院の宿舎に空きがなかったため、他大学からの留学生の方と吉田さん、山田さんの4人で SJH の近くに airbnb で1軒屋を予約しました。しかしながら、いざ着いてみると、周囲の治安に身の危険を感じました。私が1番に到着しましたが、明るい時間でも最寄りのバス停から airbnb の家まで行く道中の1分間ほどで2人の男性が後ろから「sister, sister」「你好, 你好」と声をかけて、後を追いかけてきました。予約した家自体も綺麗とは言えず、ブレーカーが入っていない、家の前にゴミが散乱している、ベッドのシーツが汚れている、洗濯機が地下にある(地下室は非常に汚い)といった問題が発生しました。そのため airbnb のホストと airbnb に連絡を取ったところ、ホストから、その場所は“very safe area”と言われ、交渉は難航しました。しかしながら吉田さんの多大な努力で最終的には全額返金に対応して頂き引っ越しました。(本当にありがとう。)引っ越し先は LGI に近い Room zzz Leeds city west という物件でした。2人で1部屋を共有して住むことになりました。値段を比較すると倍近く高いですが、治安の良さと清潔さを考えれば妥当と言えます。

今後リーズ大学に派遣される方に伝えたいのは、自身で宿泊先を探す場合 SJH 付近は避けた方が良いということです。SJH 近くの Harehills, Chapeltown, Little London 等は医師の間でも「住むのは避けた方が良い」と噂される場所です。これらの地区は移民が多く文化的に多様な地域であることは素晴らしいですが、低所得地域であり、事実として事件発生率が高いです。ちなみに Nikki 先生(後述)に Harehills から引っ越したことを伝えると、とても心配だったから安心した、と本当に喜ばれ、SJH 付近の治安の悪さについて他の看護師さんと共に語ってくれました。住居を探す際に、おすすめは Leeds city centre 付近です。Airbnb で物件を探す際は、『Superhost』かつ『★4.9 以上』かつ『レビューが10件以上』くらいの絞りをかけた上で、立地も調査するようにすると良いと思います。

実習について

新生児科コンサルタントの Nicola Mullins 先生(Nikki 先生)に指導医を引き受けて頂きました。新生児科は LGI の L43 病棟、SJH の J1 病棟に位置します。

○第1週：ICU@LGI

朝は8:30に集合し、軽くカンファレンスやレクチャーを行った後、朝回診に同行します。朝回診のチームは基本的にコンサルタント1名、ジュニアドクター1名、ナースプラクティショナー1名で入院している新生児のベッドを順番に訪れます。夜間の様子を看護師に聞き、薬剤師と薬の内容を確認します。その場で診察し、その日の方針ややる事を決定し、カルテを書いたら次のベッドへと移ります。その場に保護者がいた場合、コンサルタントから保護者へ治療方針の説明が行われます。NICUでは6-7名の新生児がいるため、これをすべて終わらせる頃には12時を過ぎてしまうこともあります。その後、脳エコーや心臓エコーなどの処置

があれば見学に行き、午後にジュニアドクター向けのレクチャーがあればそれにも参加しました。分娩室で新生児蘇生をする機会もあり、来たばかりの私にも聴診し心拍を取るという役割を任せて頂きました。

1週目はとにかく英語を聞き取り、チームのメンバーの名前を憶えて挨拶することに必死でした。Nikki先生は非常に優しく、勉強用の本を貸してくださいました。

○第2週：HDU, 外来@LGI

HDUの回診も基本的にはICUの回診と同じ流れで進行します。HDUではやや状態が良い新生児や術後の新生児が入院しているようです。この週はジュニアドクターのストライキが3日間あったため人手不足でした。この週のHDUコンサルタントのLisa先生と横隔膜ヘルニアの新生児のお産に立ち会うことができました。

この週は先天性心疾患のフォローアップ外来と二分脊椎の胎児診断外来にも参加しました。日本と違い、外来はかなり細分化されており、その他にも複数の外来が用意されています。外来は新生児科のコンサルタントの先生が行うことになっているようでした。先天性心疾患外来ではLawrence先生と一緒に聴診させていただき、時には意見を求められ非常に責任と緊張を感じました。PDAのフォローアップの患者さんが中心で、いわゆる「machine-like murmur」を聞き分ける練習になりました。

二分脊椎の胎児診断外来ではSharon先生にお世話になりました。外来に参加する前日に予習範囲を指導して頂き、必要単語を予習することができました。これによって非常に分かりやすく意味のある外来になりました。

2週目頃から1対1で会話する場合にはかなりリスニングができるようになってきました。一方で意見を求められても英語で伝えることができず、フラストレーションを抱えることもありました。また、USMLEの結果が届き、無事に受かっていたので安堵しました。

○第3週：Postneonatal Unit, 外来, Children Assessment treat, ICU @LGI

この週は普段の朝回診への参加に加えて、Postneonatal Unitにも訪れました。ここでは、退院する新生児の身体診察や健康な新生児の身体診察を行いました。病児と比較して、ラインや心電図を付けていないため、診察の練習がしやすく原始反射の確認も自身で行うことができました。この週はElgin先生がこのユニットの担当で、頭部から四肢の診察まで1から丁寧に教えて頂きました。おむつ替えの仕方も伝授して頂きました。

更に、2つの外来を見学しました。Liz先生のGeneral neonate clinicでは先天性梅毒の乳児が来院しており、日本では滅多に見られないため、非常に興味深かったです。またBrown先生の先天性心疾患の胎児診断を扱う外来にも同席しました。房室中隔欠損症の所見が見つかり、21トリソミーについて、予後について、生まれてから必要な治療について患者さんに説明する一連の流れを見学することができました。

また普段の回診での診察も部分的に任せて頂けることになりました。ジュニアドクターの真似をしながら自分なりにイメージトレーニングをしていたつもりでしたが、身体診察の所見を英語で述べる能力がまだまだ足りないことも痛感しました。診察の順番や箇所は理解していても、異常な所見を見つけた場合にその異常所見を表現することが課題であると感じました。



本期間中の medical electives 7 名

○第4週：Neonatal unit @SJH

SJH は LGI と比較し、状態が安定している新生児が入院しています。全部で 20 人ほどの新生児がいましたが、それを医師 3 人で管理しており、かなりの忙しさのようです。私も第 3 週までに学んだことを生かして診療の手助けができるように努めました。腰椎穿刺の準備をしたり、書類の受け取りにいたり、NIPE の介助をしたりなどです。忙しい中でもフィードバックの時間、救急疾患の鑑別診断を一緒に議論する時間を私のために割いていただいたことがとても嬉しかったです。一方でリスニングがうまくできず、指示を繰り返してもらうことも度々あり、もっともっと英語を学ぶ必要があると感じました。



最終日に Supervisor の Nikki 先生と。この日はお休みだったにも関わらず病院に来てくださいました。前日 Nikki 先生宛にほぼ徹夜で手紙を書き、サマリーを仕上げているため、寝不足で私の顔が疲れていることだけは後悔です。

実習のまとめ

自大学と Leeds 大学の新生児科にはやはり大きな違いを感じました。Leeds ではガイドラインに従った診療を中心とし、人員には余裕があり、医師と患者の対等な関係性が築かれています。回診中に親御さんも同席し、患児の様子や今後の方針についてコンサルタントと一緒に相談する姿は日本では見られないと思います。

自大学(ないしは日本の病院において)は圧倒的な医師不足が大きな問題とされており、面会に来た両親との関係性もややドライな面があると言えます。しかしながら、本期間中、Leedsの医師から日本の未熟児に対する治療や壊死性腸炎の発生率の低さについてなど多くの質問をされ、日本の医療に対する賞賛を受けました。例えば未熟児について、Leedsでは400gが過去の受け入れ例として最小とのことでしたが、自大学では300gをわずかに切るような未熟児も入院しております。しかし、すべての質問に上手く答えることはできず、自分の知識不足を思い知ることもありました。

本実習の中で、一番の壁は言語でした。「海外で暮らしたこともなく、一般の日本の英語教育しか受けていない」からと言って言い訳をしても英語力が伸びることはなく、英語話者と信頼関係を気づくことはできません。挨拶を徹底したり、分からないときは聞き返したりする地道な努力が大切であると気づくことができました。それを踏まえ、今回の期間中、keenでありeagerであり続けることはできたと自負していますが、よりアカデミックで医学的なことを学びたいと思ったとき、必要とされる英語力を獲得できるよう帰国してからも努力したいです。

一方で、日本語で医学を学べる特別さ、ありがたさも痛感しました。インド等、基本的に他国では母国語で医学を学習することは殆どなく日本の医学教育はとても特異的なものです。その強みを活かしながら、今後の学習に取り組みたいと思います。

その他の経験

○イギリスは紅茶文化があることは有名ですが、これはリーズ大学の病院でも実感できました。まず、朝回診を終えたら回診チーム全員で一旦休憩室に行き tea か coffee の時間を設けます。さらに、午後3時頃になると tea trolley と呼ばれる紅茶やジュース、お菓子を運んだワゴンが病棟に現れ、無料でミルクティーとお菓子を頂くことができます。イギリスの人気のお菓子、ice pop や jammy dodgers も頂戴し、非常にこの文化が気に入ってしまいました。(ちなみにNICUの病室の中にまで配りに来てくれます。外来の部屋の中に届けてくれることもありました。さらにはカテーテル挿入中の清潔野の先生にも直接話しかけ紅茶が必要か聞きます。紅茶を飲ませることに使命感さえ感じます。)病棟の事務の方と看護師さんから jammy dodgers の発音指導を受け、上手く発音できるようになりました。

○イギリスにおける外国人ドクターの多さに驚かされました。私が出会った中だけで、インド、ギリシャ、ルーマニア、パキスタン、エジプト、マレーシア、ナイジェリア出身の先生方がいらっしゃいました。イギリスでは医師不足を外国人医師によって補っているようです。いずれの先生も第2言語としての英語を使いこなし、医療現場で活躍する姿に、自身も見習いたいと感じました。

○週末にはお出かけもできました。詳しくは吉田さんの報告書を読んでください。

費用について

飛行機 25万円

食費、旅行代 10万円

住居費 18万円

交通費 1万円



←Leeds University の図書館

終わりに

Supervisor を引き受けてくださった Nikki 先生は多くの時間を割いて頂いただけでなく、週末の予定まで一緒に検討してくださいました。いつでも暖かく接していただき、その期待に応えたいと強く思ったことが、この1か月間のモチベーションになりました。また病棟の医師、看護師、その他スタッフの皆様、患者さんの保護者さんたちが優しく迎え入れてくださったこともとても嬉しかったです。加えて病棟で出会った大変に小さく、まさに lovely な患者さん達には医学生として多くの事を教えてもらいました。彼らの必死に生きる姿に、毎日鼓舞されました。

最後になりましたが、この機会を用意してくださった財団の皆様、一緒に財団から派遣された吉田さん、山田さん、協定校で同期間実習していた古谷さんには多くの局面で支えられました。本当にありがとう、みんながどんな医師になっていくのか、心から楽しみです。

今回の学びを糧とし、立派な医師になれるよう今後とも精進して参ります。ありがとうございました。

Leeds University 臨床実習報告書

国際医療福祉大学医学部医学科 6年 吉田 結美子

1. はじめに

この度は、医学教育振興財団が主催する英国大学医学部短期留学に参加させていただく機会を頂き、心から感謝申し上げます。私は2023年6月5日から6月30日までの期間、英国リーズ大学の St. James Hospital と Leeds General Infirmary の産婦人科で臨床実習を行いました。この実習を通じて、多くの医師、看護師、そして患者から直接学ぶことができ、その経験は私の医師としてのキャリアにおいて非常に価値あるものとなりました。また、このような機会を提供してくださった医学教育振興財団、そして私を支えてくださった大学の先生方、事務の方、友人に心から感謝申し上げます。

この報告書を通じて、私の経験が今後英国での短期留学を考えている方々の参考になれば幸いです。

2. 選考について

● 応募理由

大学からの案内を通じて海外医療実習プログラムを知った際、過去の報告書を読む機会がありました。その中で、先輩方が非常に充実した実習を経験していたことが魅力的に感じました。さらに、実習内容に関してフレキシブルに対応してもらえるという情報も目を引きました。産婦人科領域の特に生殖医療に強い興味を抱いており、イギリスでは生殖医療関連の制度が充実していると知っていた為、実際にその環境を見てみたいと思いました。また、国際医療福祉大学のカリキュラムには、低学年から英語での医療面接や身体診察などが実践的に行われる機会があります。その一環として1ヶ月の海外実習が卒業条件となっており、自分の学びを実践で試し成長するためには絶好の機会だと感じました。以上の理由から、私は海外医療実習プログラムに応募しました。

● IELTS について

実際に海外医療実習プログラムを知ったのは5月頭で、学内選考が1ヶ月以内にあるとのことで、書類の準備には時間的に厳しい状況でした。特に IELTS の受験はした事がなく集中的な対策と準備が必要でした。IELTS の受験申し込みの際、1か月間無料で提供されるオンライン IELTS 対策キットを手に入れたので、それを利用してひたすら練習しました。IELTS は評価基準が明確でありそれに合致するような回答を作成することが重要だったため、都度自分の答えを確認しながら勉強を進めました。特に Writing と Speaking は独特なフォーマットを要求されるため、何度も型を練習しました。Speaking に関しては Youtube の公式動画などを見て練習しました。

● 面接

面接は東京都の御茶ノ水で行われました。私が聞かれた内容を下にまとめたいと思います。

覚えていない部分もあるのですがご了承ください。2023 年度は2部屋あり、一部屋目は日本語で、二部屋目は英語で行われました。

構えていた『興味深い症例に関して説明してください』、や『血圧の測り方を英語で説明してください』などの質問はありませんでした。

Room 1 面接官3人

Q. なぜNewcastleではなくLeedsを第一志望にしましたか？

Q. Care fertility Leedsについてもっと教えてください。どんなところが凄いのか。(Care fertilityとは現在イギリスで生殖医療を行なっている民間の病院なのですが、リーズにも施設があるということで面接の最初の方で話していました。)

Q. 留学生と一緒に過ごす機会はありましたか？

Q. 留学生と一緒にいて困ったことはありましたか？文化の違いなど(大学の寮で留学生と暮らしていたという話を受けて)

Q. 国際医療福祉大学は英語で授業を行っているという事ですが、逆に日本語で困ったことはありますか？

Q. イギリスではどんなことを学びたいですか？

Room 2 面接官3人

Q. 英語で自己紹介をしてください。(1min)

Q. あなたの学校の良いところを教えてください。

Q. あなたの学校のカリキュラムが英語でよかったことはありますか？具体的にどのように今回の留学に役立ちそうですか？

Q. Physician scientistという仕事にどんなことを留学から活かせますか？(応募書にPhysician scientistになりたいという内容を書いていた為)

Q. 学校のカリキュラムに臨床研究医コースはないのですか？

Q. 研究室に参加とかはしなかったのですか？

自分がどんな将来を思い描いて、イギリスでの実習でどんな事を学びキャリアに繋げて行きたいかがはっきりしていると面接でもスムーズに話せると思います！

3. 事務手続き、留学準備

以前の手続きと変わった点がいくつかあったのでそれらを記載したいと思います。

● 大まかな流れ

8月末～財団から合格の連絡をいただく

12月頃～University of Leeds への Application 開始 (Academic Transcript, Letter of Recommendation from my university, Evidence of English language Certification, ID Pages of Passport, JPEG photo, Personal statement)

3月頃～Acceptance のメールが届く

3月末～official Acceptance Letter が届く

4月頭～Leeds University からもらった Accommodation List を通して住居を探すも空きなし

4月末～Leeds の留学生担当者とオンラインでミーティング(そこでビザが必要と言われるが、実際には必要なかった)

住居は Leeds に行く日本人 4 人で Airbnb を探すことにする

5 月頭～ICC check (ICC check とは、実習や就職の前に会社側が security watchdog という会社に依頼して身元のスクリーニングを行う作業) が開始されるが、Security Watchdog からのメールが Google の“promotions”に来ておりなかなか気付けない

Leeds の留学生担当者から至急 ICC check を行うよう催促が来て初めて気づき、急いで書類を提出

5 月半ば～Placement がわかる

その後 Occupational Health Forms や visiting student registration application form などが送られる。急いで血液検査や書類作成を行う...

6 月頭～実習に関するオリエンテーションの書類が届く

6/5 実習開始

上記スケジュールから分かるように、かなりギリギリの準備が多くとてもストレスでした。来年度はここまでギリギリにならない様に頑張ります、とリーズ大学の留学生担当者の方も仰っていました。Occupational Health Forms や visiting student registration application form が遅れた理由としては ICC check が遅かった為、という事でしたのでメールが来ないなと思った時は是非 Gmail の promotions のファイルを確認してください。

- 以前と (おそらく) 変わった点

Security watchdog (会社) による ICC check が行われることになったので、渡航証明書 (各都道府県の警察署で発行されるもの) が必要ないと思います。また ICC check に必要なのは Passport のみでした。他には、日本からの留学生であればビザがいらないという事や、医療過誤保険の英文証明書がいらないという点が挙げられると思います。

4. 実習科について

- スケジュール

私は産婦人科に配属されたのですが、他にも二人 (合計 3 人) 産婦人科をローテーションした為、3 人のスケジュールが被らない様に調整してありました。下の例にあるように、AM/PM でスケジュールが決まっており、産婦人科は St. James Hospital (SJH) と Leeds General Infirmary (LGI) 両方にある為行き先は日によって違いました。(St. James Hospital と Leeds General Infirmary の間には 20 分ごとに発車する職員用のシャトルバスがあるので移動には困りません。)

Monday 12.6.23	Tuesday 13.6.23	Wednesday 14.6.23	Thursday 15.6.23	Friday 16.6.23
LGI- Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 8.45 AM- General ANC Clinic- Dr Klein	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 8.00 AM- Pre Term Clinic- Mr Simpson	SJUH- Gledhow Wing, Level 5, Delivery Suite- 8.30 AM - Ceri Mowat	LGI- Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 8.00 AM- Pre Term Clinic- Mr Simpson	LGI-Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 8.45 AM- Haematology Clinic- Dr Ciantar
LGI-Clarendon Wing, C Floor, Antenatal Clinic- 1 PM- Maternity Assessment Centre- Elizabeth Petty	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 1 PM- Endocrine Clinic- Dr Rathod	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 1 PM- Diabetic Clinic- Dr Klein	LGI- Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 1 PM- Antenatal Day Unit- Sarah Tuke	PM- Online Teaching -Dr Ciantar

- 実習内容

- 全般

基本的には上記のスケジュールに沿って実習を行います。スケジュールはかなりフレキシブルに変更できました。例えば、私は生殖医療に興味があったのですが残念ながら SJH と LGI では行っておらず、指導医の Dr. Ciantar に相談した所、Seacroft 病院で働く生殖医療専門医の先生に繋げてくださり、2日分の AM の時間を生殖医療の外来見学できました。他に陪席した外来としては妊娠中、あるいは妊娠希望の膠原病患者を膠原病内科と産婦人科で一緒に診る joint clinic や、精神科と産科の joint clinic, Obstetrics MDT などがあります (MDT とは Multidisciplinary Team の略ですが、内容としては多数の診療科が関わるハイリスク妊婦に関する治療方針などを話し合うミーティングです)。実習は1ヶ月しかないのも特別に見たい手技や外来、分野などがある際は実習の初めに指導医に相談すると思います。基本的に積極的な態度に関しては no と言われることはないと思います。

- 外来見学

リーズは非常に大きな都市であり、産婦人科も充実しています。様々な合併症 (内分泌系疾患、膠原病、血液病、多胎妊娠、recurrent miscarriage, preterm リスクなど) を持つハイリスク妊婦に対応できる専門的スタッフが揃っています。様々な専門外来を見学できるのはとても興味深く、非常に勉強になりました。

外来関連で他にもとても興味深かったのは、イギリスの医療が patient oriented であり、患者に病状や治療の説明をする際には必ずなん分の1、という具体的な数字を使う所でした。この技が出来るのは、実はイギリス全国のカルテが共通であり、データ収集しやすく、ガイドラインが細かく決まっているからです。この仕組みの素晴らしい所は全国どこでも基本的に同じ質の医療を受けられる事ですが、その分一回の外来に30分ほど、その後のカルテ記載に15~20分ほどかかります。大規模な臨床研究に参加しやすいのは言語だけでなく、このような環境にも要因があると思いました。



左の写真は産婦人科の指導医をして下さった Dr. Etienne Ciantar と産婦人科と一緒にローテーションした順天堂大学の山田さんと慈恵大学の古谷さんです。(左から山田さん、私、Dr. Ciantar,古谷さん)

Dr. Ciantar は産科の中でも血液疾患の専門で、外来などでとても丁寧に教えてくださりました。

- 生殖医療外来

生殖医療は大まかに不妊に対する薬物治療、手術、IVF になります。イギリスではまず自分の

General Practitioner (GP、かかりつけ医)から生殖医療専門医に referral され、生殖医療専門医の間診、診察、診断を元にその後の流れが決まります。IVF が必要だと判断された場合はリーズ内だと Seacroft 病院にある Care Fertility という IVF 専門の民間施設に referral されます。イギリスの医療は全て無料である代わりに、治療を受ける為の基準が厳しかったりします。例えば IVF に関しては、40 歳以下 (40 歳以下だと IVF 3round、40-42 歳だと IVF 1round、2 年以上の不妊、または artificial insemination を 12 回以上行っている、IVF が初めてである、卵巣機能に問題がない (ovarian reserve)、タバコを吸っていない、BMI<30、子供がいない (相手の連れ子であっても適応される) などの条件を満たしていないと自費での治療になり、高額な医療費を前に治療を断念する患者などもいました。

私が見学した一つ目の外来では GP から referral された初診の患者さんを診ることが出来ました。パートナー二人ともに基本に忠実で詳細な問診をした後、鮮やかに問題点を見つけ出し、必要な介入をリストアップする姿はとてもかっこよかったです。

二つ目の外来は Pre implantation Genomic Testing (PGT) の外来でした。日本でも少し認知度が上がってきていると思うのですが、これは IVF で出来た受精胚の遺伝子を直接チェックするテストです。PGT には大まかに三種類あります。PGT-A (染色体数の異常を調べる、Down 症、Edwards 症、など)、PGT-M (単一遺伝子疾患による遺伝性疾患)、PGT-SR (染色体の構造的再配列) です。この外来では主に PGT-M の適応となる患者に対する治療方針の説明などを行っていました。イギリスでは PGT-M の適応となる遺伝疾患が Human Fertilization and Embryology Authority によって厳格に定められており、現在 600 以上の遺伝疾患に対して適応となっています。この外来で印象的だったのは対象疾患の多さだけでなく遺伝疾患を持つ患者の思いでした。日本では PGT-M の対象となる疾患は多くなく、審査も厳しいです。遺伝疾患を持たない胚を選ばない事で現在そのような疾患を持つ人や患者が差別を受けてしまうのではないかという懸念が大きいと思います。一方で、この外来で見た患者の多くは自分の子供には大変な思いをして欲しくないという気持ちが強く、PGT-M を希望していました。新しい治療に関する制度作りを行う際には実際にその治療を受けることになる患者や家族の声もしっかりとデータとして取り入れる必要があると強く感じました。

➤ Maternity Assessment Center (MAC) について

MAC とは妊娠中および産後の母親と胎児の健康状態を評価し、適切な医療ケアを提供するための専門的な施設です。妊娠中で何か問題があった時 (胎児の動きが感じられなくなった、下からの出血がある、予定日前だけ破水した、などの産科的な症状だけでなく、腹痛、めまい、嘔吐などの一般的な症状でも連絡できます) にとりあえず電話して指示を仰ぐ所になります。MAC の実習では患者さんへの問診、診察、担当医への簡単な症例報告をさせてもらえました。国内実習では症例報告 (英語では case presentation と言います) をする機会はなかなかなかった為最初はかなり緊張しましたが、2 回ほど行くと慣れると思います。症例報告の後には一緒に患者さんに会いに行き、診察した後フィードバックをいただける機会があったのでとても勉強になりました。イギリスの NHS は予算の関係上簡単に検査が出来ないので日本に比べて問診や身体診察に力を入れています。日本の実習ではあまり練習しにくいと思いますが、問診、身体診察、症例報告は型が決まっているので練習するといいいと思います。私は渡英前に大学の友人とオリジナル症例で練習したり、アメリカでの臨床経験のある先生にお願いしてもらっていました。

➤ 実習で苦労した点

英語に関しては Yorkshire 訛りが難しかったです。特に患者や看護師、助産師は地元の人が多いので訛りが強く、先生に話を聞かなくてはならない事が多々ありました。また、産婦人科の場合は毎日出会う医師や助産師が違い、毎日新しい関係性を築く必要があったのは大変でしたがその分様々な人に出会えてよかったと今は思っています。また、産科の医師や助産師は皆とても忙しく、初めの方は上手に声をかけられなかったのですが萎縮せずにどんどん声をかけると良いと思います。

5. 終わりに

一ヶ月という短い期間ではありましたが、非常にたくさんの学びを得る事が出来ました。イギリスという他国の医療制度の中で実習する事によって日本の医療制度の良い点、悪い点が特にクリアになりました。私は特に生殖医療の分野において今後日本でどのような制度づくりが必要とされるのかを少しだけでも理解できた事に感謝しています。もちろん実習もとても充実していましたが、休日も一生懸命楽しみました。指導医に勧められた Edinburgh や York、Whitby はまた Leeds と違う雰囲気でも楽しかったです。

今回の実習でお世話になった Dr. Carrie Lenton, Dr. Etienne Ciantar、国際医療福祉大学医学部の先生方及び事務部の皆様、リーズ大学派遣生の千葉大学の天津山彩子さん、順天堂大学の山田春花さん、東京慈恵医科大学の古谷遥香さんにこの場を借りて御礼申し上げます。

現地で必要とした経費

飛行機代 Haneda⇄Heathrow 30 万

滞在費 15 万

通信費 2500 円

交通費 (Britrail Flexipass 4 日分) 2 万 5700 円

食費 (病院の購買などで) 一食 1000 円

リーズ大学産婦人科での学び

順天堂大学医学部医学科 6年 山田 春花

1. はじめに

2023年6月5日から6月30日までの4週間、公益財団法人医学教育振興財団(JMEF)のご支援により、リーズ大学での臨床実習の機会をいただきました。COVID-19流行による英国短期留学の中止後初めての留学であり、本当に実習ができるのか最後まで不安でしたが、財団やリーズ大学からのサポートにより無事に終えることができました。今までとは異なる点など、参考になれば幸いです。

2. 応募から選考まで

大まかな流れとしては下記の通りです：

2022/4/23 大学で英国短期留学に関する周知

6/12 IELTS 受験

6/20 学内面談

6/30 学内推薦者決定

7/19 JMEF 応募期限

8/3 JMEF 書類選考合格

8/23 JMEF 面接

8/30 英国短期留学決定

IELTS

順天堂大学では IELTS の点数が学内選考において重要であると聞いていたため、リーズ大学の応募資格である Speaking 6.5 および Overall 7.0 よりも高い点数を目指し、Overall 8.0 (Listening 8.5, Reading 8.5, Writing 7.0, Speaking 8.0) を取ることができました。対策としてはオンライン模擬試験を解き、実際の試験に近いフォーマットで練習していました。英国の独特な言い回しなどに慣れるために YouTube でイギリス英語を聴くようにしていました。特におすすめなのは、“Real Stories”というチャンネルの“Junior Doctors Diaries”というドキュメンタリーで、listening 対策だけでなく、イギリスの医療現場の現状について知ることができます。

面接

面接試験は東京都の御茶ノ水で行われました。コロナの影響かもしれませんが、面接は2部屋に分かれて行われました。1部屋目では4人の面接官、2部屋目では3人の面接官の先生がいらっしゃいました。それぞれの部屋で聞かれるテーマなどは特に決まっておらず、応募書類

に書かれたことに関して質問され、医療知識に関する質問はありませんでした。基本的に日本語で聞かれた質問は日本語で、英語で聞かれた質問は英語で答える形でした。参考までに、以下のような質問を聞かれました：

1 部屋目

- 日本は移民の方々にとって住みやすいと思いますか？（英語）
- 将来移民の方達に医師としてどのようなことができると思いますか？（英語）
- （産婦人科志望と書いたため）産婦人科は成り手が少なく、重労働ですがそれでもやっつけられると思いますか？
- LGBTQsの方々についてどう思いますか？

2 部屋目

- 1分間で自己紹介してください。（英語）
- イギリスで学んだことをどのように活かしていけると思いますか？
- なぜ産婦人科を目指そうと思いましたか？

3. 留学準備

主な手続きの流れは下記の通りです：

- 2022/12/5 リーズ大学 **visiting elective application** の開始
- 2023/3/31 **Acceptance Letter** 暫定版の送付（実習科未定）
 - 5/2 **International Criminal Check** の開始
 - 5/19 **Visiting Student registration application form** の提出
 - Occupational Health form** の提出
 - Acceptance Letter** 決定版の送付（実習科決定）
 - 5/26 **International Criminal Check** 終了

必要書類

リーズ大学での **Online application** の時点で必要な書類は以下の通りです：

- **Academic transcript**
- **Letter of recommendation**
- **Personal statement** (around 200 words explaining why you are interested)
- **IELTS certification**
- **ID** (passport)
- **Photo**

Online application の終了後、**Occupational Health form** の提出の際に抗体価やワクチン接種歴の証明書が必要でした。

ビザ

以前は **Tier 4 visa** が必要であったとのことでしたが、今回は **Standard Visitor Visa** で大丈夫でした。日本のパスポートでは事前にビザを取得する必要がありませんでした。

International Criminal Check (ICC) に関して

今までは警視庁または警察署で犯罪歴の証明書(DBS)を取得する必要がありましたが、今回は ICC というシステムを通しての確認で、オンラインで個人情報の記入とパスポートの写真の提出のみで大丈夫でした。事前連絡では、住所や身分を証明するもの3点(パスポート、残高証明書、免許証など)を用意する必要があるとのことでしたが、パスポートのみで本人確認ができたようでした。一つ一つの書類を準備するのに時間がかかるので、前もってどの書類が必要なかを確認しておいた方が良さそうです。

4. 実習

私は産婦人科で実習を行いました。今回は observational role とのことで、手技などはあまりできませんでしたが、外来見学、医療面接、分娩見学、帝王切開での手洗いなどを経験することができました。スケジュールは与えられましたが、あくまで暫定的なものであり、自分の興味のある分野に集中して見学しに行っても良いとのことでした。私は外来よりも分娩に興味があったため、よく Delivery Suite に行っていました。また、6月14日から16日にかけて junior doctor strike があったため、その期間中は病棟実習を行わず、リーズ大学が用意してくださったワークショップに参加しました。

Monday 5.6.23	Tuesday 6.6.23	Wednesday 7.6.23	Thursday 8.6.23	Friday 9.6.23
Induction	LGI- Clarendon Wing, Worsley Building, Level 9, Room 9.88, Division of Womens and Childrens Health- 9 am- Introductory meeting. SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 10.00 AM- Pre Term Clinic	SJUH- Gledhow Wing, Level 5, Delivery Suite- 8.30 AM	LGI- Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 8.00 AM - Pre Term Clinic	LGI-Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 8.45 AM- Haematology Clinic
LGI- Clarendon Wing, C Floor- 12.30 PM- Maternity Assessment Centre	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 1 PM- Endocrine Clinic	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 1 PM- Diabetic Clinic	LGI- Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 1 PM - Antenatal Day Unit	Online Teaching
Monday 12.6.23	Tuesday 13.6.23	Wednesday 14.6.23	Thursday 15.6.23	Friday 16.6.23
SJUH-Chancellor Wing, Level 2, J24, Miscarriage Clinic	LGI- Clarendon Wing, C Floor- Delivery Suite- 8.30 AM	LGI-Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 8.30 AM- Fetal Medicine	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 8.45 AM- General ANC Clinic	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 8.45 AM- General ANC Clinic
SJUH- Chancellor Wing, Level 2, GATU Gynaecology Clinic- 1 PM	LGI- Clarendon Wing, C Floor - Delivery Suite- PM	LGI-Clarendon Wing, C Floor, Antenatal Clinic- 1PM- Maternity Assessment Centre	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 1 PM- Diabetic Clinic	PM- Online Teaching
Monday 19.6.23	Tuesday 20.6.23	Wednesday 21.6.23	Thursday 22.6.23	Friday 23.6.23
LGI- Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 8.45 AM- General ANC Clinic	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 8.00 AM- Pre Term Clinic	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 8.45 AM- General ANC Clinic	LGI- Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 8.00 AM- Pre Term Clinic	LGI-Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 8.45 AM- Haematology Clinic
LGI-Clarendon Wing, C Floor, Antenatal Clinic- 1 PM- Maternity Assessment Centre-	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 1 PM- Endocrine Clinic	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 1 PM- Diabetic Clinic	LGI- Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 1 PM- Antenatal Day Unit	PM- Online Teaching
Monday 26.6.23	Tuesday 27.6.23	Wednesday 28.6.23	Thursday 29.6.23	Friday 30.6.23
SJUH-Chancellor Wing, Level 2, J24- Miscarriage Clinic- 8.30 AM	LGI- Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 8.45 AM- General ANC Clinic	LGI- Clarendon Wing, C Floor- Delivery Suite- 8.30 AM	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 8.45 AM- General ANC Clinic	SJUH-Chancellor Wing, Level 2, J24- Miscarriage Clinic- 8.30 AM
SJUH- Gledhow Wing, Level 5, Antenatal Clinic- 1 PM- Maternity Assessment Centre	LGI- Clarendon Wing, A Floor, Antenatal Clinic- 1 PM- Antenatal Day Unit	LGI- Clarendon Wing, C Floor- Delivery Suite- PM	SJUH- Gledhow Wing, Level 4, Antenatal Clinic- 1 PM- Antenatal Day Unit	PM- Online Teaching

実習病院

産婦人科の実習先としては Leeds General Infirmary (LGI) と St. James's University Hospital (SJUH) の2病院でした。LGI と SJUH の違いとしては、患者層が異なる事、SJUH にはみ婦人科があること、LGI に大規模な NICU があるためハイリスク妊婦が集まりやすく、SJUH には

比較的ローリスク妊婦が集まりやすい点です。この2つの病院間はスタッフ専用のシャトルバスが20分ごとに運行しており、無料で乗ることができました。

服装

学生用のスクラブ上下セットが配布されるので、実習中はスクラブを着ていました。一部外来陪席では私服のままでも問題はありませんでした。一応実習マニュアルには、病院へはスマートカジュアルで行き、病院でスクラブに着替えるようにと書かれていました。

外来

産婦人科における外来は多岐に渡り、とても専門性が高いと感じました。特に印象に残っているのは **Pre Term Clinic** です。この外来では早期産の既往がある方がいらっしやり、経膈エコーで頸管長の測定や、腹部エコーで胎児の発育を確認していました。先生曰く、経膈エコーでの頸管長の測定は全ての妊婦で行っておらず、全ての妊婦で行う事は過剰処置であると考えられているとのことでした。

Maternity Assessment Center

Maternity Assessment Center (MAC) は妊産婦の救急科で、24時間開いており、医師と助産師が常駐していました。腹部痛を訴える方、妊娠悪阻がひどい方、呼吸苦を訴える方などがいらっしやっていました。私は主に、医療面接を行い、先生に患者さんの情報を伝え、足りない情報を先生と一緒に聞きに行ったり、先生による身体診察を見学したりしていました。

Antenatal Day Unit

Antenatal Day Unit (ANDU) は8時半から17時まで空いており、助産師のみで成り立っています。主に、胎動減少を訴える方が来ており、助産師が胎児心拍陣痛図のモニタリングを行っていました。医師の診察が必要であると判断されると **MAC** へ送られていました。また、ANDUでは骨盤位の胎児を矯正する外回転術を施行しており、とても興味深かったです。まず **CTG** で胎児のモニタリングを行い、異常がなければ $\beta 2$ 刺激薬を投与し、子宮筋を弛緩させた後に施行していました。成功率は6割だそうで、妊婦には常にリラックスし力を入れないようにアドバイスしていました。基本的には妊娠36週以降に施行しており、早期に行っている方の成功率が高いように見えました。私が見学した際は5人中2人が成功しており、2人とも37週の妊婦でした。一方、回転しなかった3人の内2人は妊娠38週であり、助産師の方ももう少し週数が早ければ上手く行ったかも知れないとおっしゃっていました。イギリスで外回転術が施行されている理由としては、妊婦の分娩方法の選択の自由が関係しているかも知れません。日本では特別な理由がない限り帝王切開術は行われませんが、イギリスでは妊婦が選択できる立場にあり、経膈分娩を希望する妊婦が積極的に外回転術をお願いしていました。

Delivery Suite

Delivery Suite では分娩の見学を行いました。分娩室では妊婦1人につき最低1人の助産師が常についており、胎児心拍や陣痛の頻度をモニタリングしていました。ローリスク妊婦であれば基本的に医師は呼ばず、助産師のみで分娩を行っていました。実習期間中1度だけ、医師

が呼ばれた分娩に遭遇しました。その方は初産で娩出力が弱く、分娩が遷延していたため急遽医師が呼ばれ、鉗子分娩となりました。日本では、鉗子分娩はあまり多くの医療機関で行われていませんが、イギリスでは主流のようでした。

イギリスでは日本とは異なり、陣痛時の鎮痛法が多様でした。Entonox gas、温かいタオル、モルヒネ、硬膜外麻酔がありました。日本に比べ無痛分娩も主流であることから、このような選択肢が多いのではないかと感じました。

別日には帝王切開の見学を行ったのですが、パートナーの方も入室していたことに驚きました。硬膜外麻酔導入時よりパートナーが同伴し、術中はパートナーが術野に背を向けて座るように伝えられていました。ほぼ全ての妊婦のパートナーが同伴しており、文化の違いを大いに感じました。帝王切開は3回までとされていますが、4人目の帝王切開予定の妊婦の切開術を見学しました。胎盤癒着などのリスクがありましたが、癒着は認められず、分娩はスムーズに終わりました。分娩後、医師がこれ以上の妊娠出産は危険であることを伝え、避妊するようにアドバイスしていました。帝王切開は主に見学でしたが、手洗いをし、術野に入ることもありました。

帝王切開術後の管理としては、疼痛、排便、排尿、帯下などを確認し、問題がなければ退院という形でした。18ヶ月の間妊娠出産を控えるように伝えており、様々な避妊方法（プロゲステロンの投与など）を紹介していたのはとても印象的でした。

イギリスは移民が多く、英語が話せない方も少なくないため、通訳システムが確立されている事は日本との大きな違いであると思いました。タブレット端末で通訳システムに連絡し、通訳のオペレーターを介して診察などを行っていました。分娩の際にも使用しており、いきむタイミングや薬を注入する際の説明を行っており、イギリスならではの光景だと思いました。

Junior Doctor Strike

今回の実習中、6月14日から16日にかけて Junior Doctor Strike があり、病棟実習は中止となりましたが、代わりに Communication Skills Teaching Session や Clinical Skills のワークショップが用意されました。

Communication Skills Teaching Session は、患者さんとのコミュニケーションに関するセッションでした。実際の患者さんが協力してくださり、言葉選びや立ち振る舞いに着目したフィードバックをもらうことができました。また、他の学生が患者さんと話しているところも聞くため、お互いに学び合える環境がとても良かったです。

Clinical Skills ではシミュレーターでの静脈穿刺や超音波ガイド下穿刺を体験することができました。超音波ガイド下穿刺はなかなか体験する機会がなかったため、とても興味深く、短軸方向と長軸方向両方向でのアプローチを練習することができました。超音波ガイド下穿刺はリーズ大学の学生全員が一度は体験するそうで、より進歩した医学教育を実感することができました。

5. 現地での生活

宿泊先

今までは、リーズ大学が病院内の寮を提供していたのですが、渡英2ヶ月前に寮を提供できないとの連絡を受けました。大学が所有する他の寮もありましたが、直前まで空くかどうかわ

からないとのことでした。初めは Airbnb でアパートを借りましたが色々あり、最終的には Room ZZZ Aparthotel Leeds City West というアパートスタイルのホテルに滞在しました。アパートのような設備があり、ベッド、シャワールーム、トイレ、キッチン、調理器具、食器、冷蔵庫、レンジ、洗濯機、ドライヤー、アイロン、テレビがありました。フリーWi-Fi もあり、通信に関して不便はありませんでした。朝食は無料でパンやヨーグルト、フルーツ、ジュースやコーヒーなどが提供されていました。実習病院の1つである LGI まで徒歩 10 分、Leeds City Center まで徒歩 15 分と比較的アクセスしやすい場所にあります。

交通事情

リーズはバスが発達しており、市内の移動はバスがメインです。バスは現金だけでなくクレジットカードでも支払いが可能なので現金がなくても大丈夫です。複数人でどこかへ行く場合は Uber の方が安いこともあります。

くれぐれもストライキには注意してください。あらかじめアナウンスしていることが多いですが、電車やバスの本数が減り、乗りたいバスや列車に乗れないことがあります。ストライキ情報はこまめに確認した方が良さそうです。

週末の過ごし方

土日は休みのため、色々なところに観光に行きました。エディンバラ、オックスフォード、ヨーク、ウィットビーなどに行きました。特に、ヨークは電車で 30 分という近場にあり、先生にもおすすりされました。リーズ市内にも観光名所が多々あり、Kirkgate Market や Corn Exchange、SJUH の近くにある Thackray Medical Museum なども興味深かったです。私は行けなかったのですが、Roundhay Park というヨーロッパ最大級の公園もあるので、時間のある方はぜひ行ってみてください。

BritRail Pass

BritRail Pass を購入すると比較的安く電車に乗ることができるのでおすすめです。原則としてイギリス国外にいる時しか購入できないそうなので、あらかじめ購入した方が良さそうです。以前は紙のチケットであったため自宅への郵送などに時間がかかりましたが、現在はモバイルチケットなので渡英数日前でも購入できそうです。

役に立ったアプリ

私が使用して役に立ったアプリとしては Uber、Trainline、WhatsApp です。Uber は複数人でどこかへ行く際に多用していました。あらかじめクレジットカード情報を入れる必要があるので注意が必要です。Trainline は電車や長距離バスの時刻、チケットの購入などができるアプリで、旅行の際の時間の確認や料金の比較などに使用していました。WhatsApp は日本での Line のようなアプリで、現地の先生や他の留学生などとのコミュニケーションに使用していました。

6. 最後に

リーズ大学での実習を通して、分娩時の様々な鎮痛法や外回転術など新たな学びを得ること

ができました。また、色々な背景を持つ妊産婦に出会うことができ、患者の自己決定について深く考える良い機会となりました。

今回お世話になったリーズ大学の先生やスタッフの皆様、医学教育振興財団の皆様、順天堂大学の先生および教務課の皆様、そしてともに4週間を過ごした **electives** メンバーに心より感謝申し上げます。

7. 費用

航空券：35万円

海外旅行保険：14,500円（エイチ・エス損保 P3）

交通費：約3万円（BritRail Pass 2万、Uber、バス）

宿泊費：約20万円

食費：約5万円

実習費：0円

通信費：2700円（Amazonにて Three SIM を事前購入）

2022 年度 英国大学医学部における臨床実習のための短期留学報告書
(ウェブサイト掲載版)

2023 年(令和 5 年)11 月 28 日 発行

発 行 公益財団法人医学教育振興財団

編集責任者 北村 聖

© 2023 Japan Medical Education Foundation. All rights reserved.